

仙台市文化財調査報告書第187集

仙 台 市
愛 宕 山 横 穴 墓 群

——第3次発掘調査報告書——

1994年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第187集

仙台市
愛宕山横穴墓群

——第3次発掘調査報告書——

1994年3月

仙台市教育委員会

序

愛宕山をはじめ大年寺山を含む仙台市向山周辺は、古くから多くの文化財のあるところとして知られております。江戸時代から仙台地方の総鎮守として人々の信仰を集めてきた愛宕神社や、虚空蔵堂など数多くの神社があり、現在でも参詣する人が絶えません。また、周辺の山裾斜面に多くの横穴墓が存在することも知られており、中でも愛宕山横穴墓群は、全国的にも類例の少ない装飾横穴が発見されている地域でもあります。

今回調査されました愛宕山横穴墓群は、遺存状況が必ずしも良好とはいえないものの、ほかの遺跡にくらべて調査例の少ない横穴墓を検討する上で、また、7世紀から8世紀にかけての仙台の歴史を知る上でも非常に注目されるものであります。

近年、仙台市内におきましては開発が著しく、埋蔵文化財も年々その姿を失いつつあるのが現状であります。今回発見された横穴墓も、調査後はほとんどが削平され、現在では、この横穴墓に関しては、本報告書の記録によってのみ伺い知るだけとなりました。

このようなことから、本報告書も多くの方々に利用され、郷土の歴史を知る手がかりとなれば幸いです。

末尾ながら、調査の遂行にあたってご協力いただきました多くの方々に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

平成 6 年 3 月

仙台市教育委員会

教 育 長 東海林 恒英

例 言

1. 本書は仙台市太白区向山4丁目地内に所在する愛宕山横穴墓群の第3次発掘調査報告書である。第1次・第2次調査の経緯はII-3 (P 5~6) でまとめてあるので参照されたい。
2. 本調査は、福仙興業株式会社と高橋良子邸新築工事の施行担当である株式会社NKホームとの協議により、仙台市教育委員会が委託され行ったものである。
3. 本報告書作成にあたり、整理及び編集・執筆の分担は次のとおりである。

本文執筆	熊谷裕行
遺構トレース	大山のり子・熊谷
遺物実測	小松愛
遺物トレース	小松
遺構写真撮影	調査員全員がこれにあたった。
遺物写真撮影	稲葉俊一
遺構図版作成	永田英明・熊谷
写真図版作成	永田・熊谷

編集は本課調査第一係主任木村浩二と協議しながら、熊谷が行った。

4. 遺構実測図の高さは標高値で記載した。また、方位は磁北で表している。当市において磁北は真北に対して西偏7°20'である。
5. 遺物略号は次のとおりで、各々種別ごとに番号を記した。
E 須恵器 K ガラス小玉 N 金属製品
6. 本書の地形図のうち、第1図は建設省国土地理院発行の1/25000「仙台市西南部」および「仙台市東南部」の一部を縮小して使用したものである。
7. 第2図は「仙台市仙塩広域都市計画図」1/2500の一部を縮小して使用したものである。
8. 本横穴墓群出土遺物、実測図、写真等の資料は、仙台市教育委員会が一括保管しているので活用されたい。

目 次

序

例 言

I. はじめに	1
1. 調査要項	1
2. 調査経過	1
II. 遺跡の位置と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
3. 愛宕山周辺の横穴墓群	5
III. 調査の方法	8
IV. 発見された遺構と遺物	11
【第1号横穴墓】	11
【第2号横穴墓】	12
【第3号横穴墓】	15
【第4号横穴墓】	15
【第5号横穴墓】	17
【第6号横穴墓】	19
【第7号横穴墓】	19
【第8号横穴墓】	21
【第9号横穴墓】	22
【第10号横穴墓】	27
【第11号横穴墓】	27
【第12号横穴墓】	31
【第13号横穴墓】	33
【第14号横穴墓】	35
【第15号横穴墓】	35
【第16号横穴墓】	35
【第17号横穴墓】	36
【第18号横穴墓】	36
V. 総 括	37
1. 横穴墓の構造	37
2. 横穴墓の変遷	40
3. ま と め	43
観察表・集計表	45
写真図版	47

I. はじめに

1. 調査要項

遺跡名	愛宕山横穴墓群（県登録番号：01196、市：C-028）
所在地	仙台市太白区向山4丁目70-7、70-30外
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
調査協力	福仙興業株式会社 高橋良子 株式会社NKホーム
調査期間	平成3年9月24日～平成3年10月23日
調査員	篠原信彦・主浜光朗・熊谷裕行

2. 調査経過

平成2年10月18日付けで福仙興業株式会社より仙台市太白区向山4丁目地内において、事務所兼共同住宅の建築にかかる発掘届が提出された。また平成3年9月12日には、高橋良子氏より同地内において、住宅新築に伴う宅地造成にかかる発掘届が提出された。両地点は、「愛宕山横穴墓群」B・C地点（C-028B・C）として仙台市文化財分布地図に示されている範囲内に敷地の一部がかかっており、横穴墓の存在が十分に予想された。これを受けて仙台市教育委員会では、事業主体である福仙興業株式会社及び高橋良子邸新築工事の施行担当である株式会社NKホームと協議のうえ、造成工事の際に試掘調査を実施することにした。その結果、当地には従来知られていた範囲を超えて横穴墓が構築されていることが判明した。このため申請者と協議を行い、記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなった。

9月24日から、重機にて周辺部分の崖面表土の排除を開始したところ、東半部で6基の横穴墓を確認した。さらに翌25日には、西半部でも5基の横穴墓を確認し、計11基となった。

9月26日から、各横穴墓の精査作業に入った。精査は事業主体と協議の上、東半部から行うことにした。東半部で確認された6基の横穴の中で、完全なままで保存されていたものは一つもなく、2号横穴墓と5号横穴墓がかりうじて床面の平面形を知り得るほかは、羨道部はもちろん玄門部から玄室天井部まで削平されてしまっており、遺存状況は極めてよくないものであった。また、この日の調査では、2号横穴墓の羨道部の下からと、そのさらに東側にも横穴墓を確認し、それぞれ7号横穴墓・8号横穴墓として調査を進めた。7号横穴墓は、玄室の天井部は崩落していたが、立面形を推測できる状況であった。8号横穴墓は、攪乱が著しくほと

I. はじめに

んど遺存していなかった。

西半部の調査は、9月30日から開始された。当初、5基の横穴墓（9～13号横穴墓）が確認されていたが、東半部に比較して遺存状況の良いものがある。10号横穴墓は、玄室の天井部が残存しており、玄室内には床面のほぼ半分に敷石が残っていた。また、13号横穴墓では、数少ない出土遺物の一つである直刀が発見された。

10月14日から、工事削平深度のレベルに横穴墓が存在するかどうかの調査を行った。その結果、新たに5基の横穴墓（14～18号横穴墓）の存在を確認した。そのうち、14号横穴墓は工事削平深度以下であり、奥壁のみの残存であったため精査は行わなかった。また、17・18号横穴墓に関しては、工事区域外にあるため精査は行わなかった。

最終的に横穴墓の総数は18基となったが、うち精査を行ったものは15基であり、10月18日に全ての横穴墓の精査を終了した。

各横穴墓から採取した床面直上層の土壌サンプルを、10月22日から同23日まで、大野田遺跡発掘調査事務所にて水洗した。その結果、ガラス小玉などが発見された。

なお、調査の進行にあたっては、重機・事務所の使用、作業員の援助のほか調査全般にわたって、福仙興業株式会社ならびに高橋良子氏、また施行担当である株式会社 NK ホームの全面的な協力いただいた。ここに記して、感謝の意を表したい。

II. 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

愛宕山横穴墓群の今回の調査地点は、仙台市勾当台通りの宮城県庁前（北緯38度15分54秒、東経140度52分26秒）より南方約2.5km、仙台市太白区向山4丁目に所在する。

仙台市の地形を概観すれば、西側の奥羽山脈とそれから派生している七北田・青葉山・高館の各丘陵部、東側の仙台湾沿いに広がる平野部とに大別される。また丘陵部から平野部へと七北田川・広瀬川・名取川等が流れており、中流域で河岸段丘、下流域では扇状地・後背湿地・旧河道など沖積地によく見られる特徴的な地形を形成している。

本横穴墓群の所在する愛宕山のすぐ北側には北西から広瀬川が蛇行しながら流れており、この愛宕山を過ぎて南東方向に流れ名取川と合流する。また愛宕山の南には、これと平行するように大年寺山が張り出しており、両者にはさまれるわずかな隙間が沢状に形成されている。この付近一帯は、旧地名で「大窪谷地」と称されていることから地形の一端を伺い知ることができる。本横穴墓群は、この沢に面した愛宕山の南西斜面に立地している。この沢をはさんだ南側の大年寺山北斜面や広瀬川の段丘崖にも横穴墓が構築されている。

地質的にみれば青葉山丘陵には、主に鮮新統仙台層群と第四系の青葉山層が分布している。（注：1）本横穴墓群が位置する愛宕山は、この青葉山丘陵の北東縁にあたる。地表から厚さ1～2mの火山灰層・段丘礫層があり、その下に基盤岩層が堆積している。基盤岩層の最上層は新第3紀鮮新世末期の大年寺層（細砂～粗砂の範囲にわたる砂岩を主とした岩層：絶対年代B.P. 100～200万年）であり、その下には向山層の主部の上部（従来の「八木山層」：シルト岩・砂岩・凝灰岩・亜炭の互層）が分布している。さらに広瀬川流域の下層には、軽石凝灰岩および細粒凝灰岩層である広瀬川凝灰岩部層が分布している。この大年寺層・向山層の上部とも河川ないし浅海性の堆積層で、層中に多量の貝や木葉化石等を含んでいる。

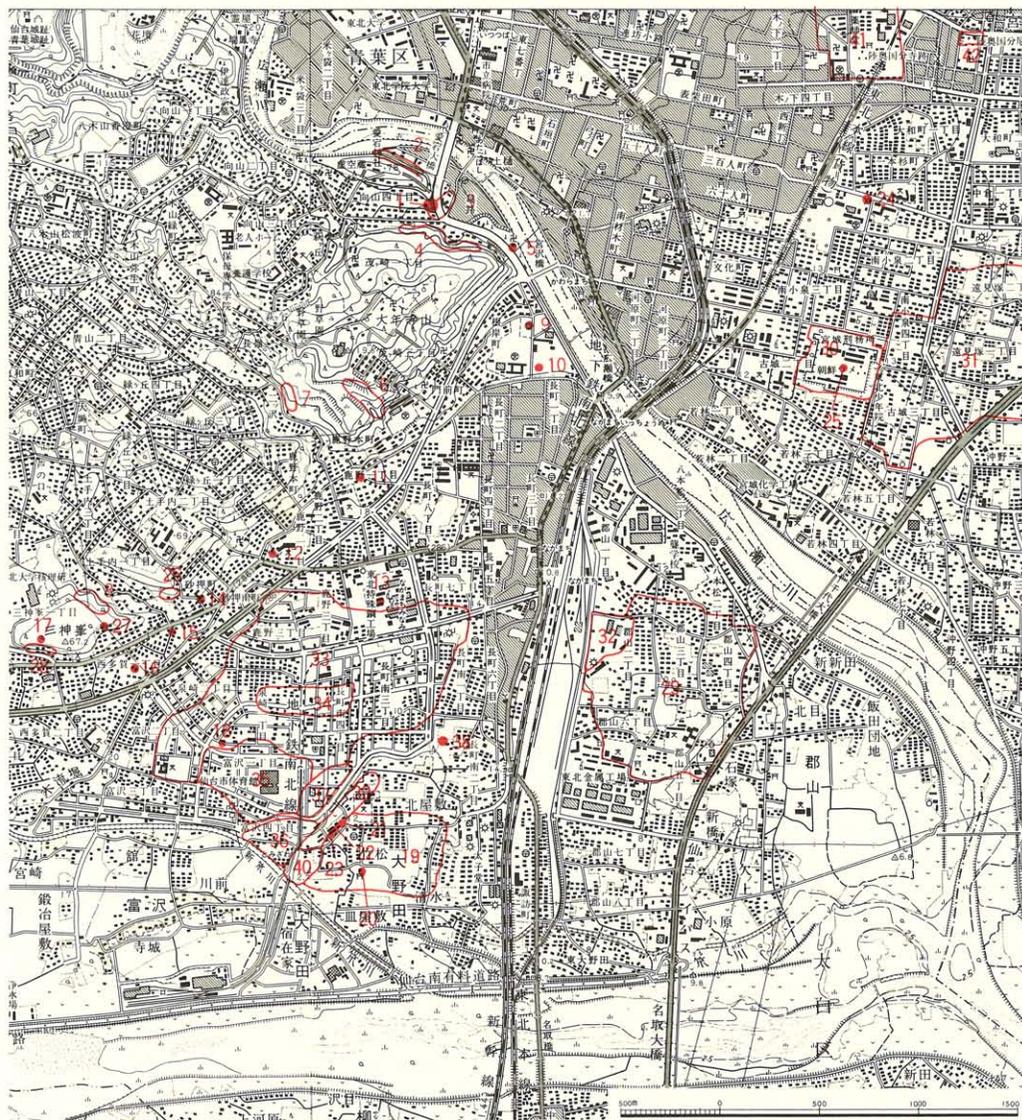
本横穴墓群は上記の大年寺層に構築されている。この層は、軟質の砂岩であるため横穴墓を構築する上では比較的容易であったと思われる。しかし随所にクラックがあり、また下層の向山層は不透水層であるため湧水が多く、崩落が激しい。

2. 歴史的環境

仙台市には前期旧石器時代から中世・近世に至るまで数多くの遺跡が存在している。各時代の代表的な遺跡を列記すれば次のようになる。

前期・後期旧石器を出土した山田上ノ台遺跡、北前遺跡。後期旧石器時代の森林跡が検出された富沢遺跡。ここでは石器や焚火跡、植物化石・昆虫化石・動物のフンなども発見された。

II. 遺跡の位置と環境



No	遺跡名	種別	立地	年代	No	遺跡名	種別	立地	年代
1	愛宕山横穴墓群第3次調査地点	横穴墓群	丘陵南西斜面	古墳(末期)・奈良?	22	五反田石棺墓	箱式石棺	自然堤防	古墳
2	愛宕山横穴墓群A地点	横穴墓群	丘陵北東斜面	古墳(末期)	23	五反田木棺墓	割竹形木棺	自然堤防	古墳
3	愛宕山横穴墓群B・C地点	横穴墓群	丘陵南東斜面	古墳(末期)・奈良	24	法領塚古墳	円墳	沖積平野	古墳(後期)
4	大年寺山横穴墓群	横穴墓群	丘陵北斜面	古墳(後期)	25	若林城内所在古墳	円墳	自然堤防	古墳(中期~後期)
5	宗禅寺横穴墓群	横穴墓群	段丘	古墳(後期)	26	土手内窯跡	窯跡	丘陵南斜面	奈良・平安
6	茂ヶ崎横穴墓群	横穴墓群	丘陵南斜面	古墳(末期)・奈良	27	金山窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳
7	二ツ沢横穴墓群	横穴墓群	丘陵西斜面	古墳	28	富沢窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳・奈良・平安
8	土手内横穴墓群	横穴墓群	丘陵北東斜面	古墳	29	郡山遺跡	官衙跡	自然堤防	古墳(末期)~奈良(初期)
9	兜塚古墳	古墳	自然堤防	古墳(中期)	30	若林城跡	城館及び集落跡	自然堤防	平安・戦国時代~江戸
10	小兜塚古墳	不明	自然堤防	古墳	31	南小泉遺跡	集落跡	沖積平野	弥生・古墳・奈良・平安
11	一塚古墳	円墳	沖積平野	古墳(後期)	32	西台畑遺跡	包含地カメ棺墓	自然堤防	縄文・弥生(中期)・古墳
12	二塚古墳	前方後円墳	沖積平野	古墳	33	富沢遺跡	水田跡・包含地	沖積平野	旧石器~近世
13	金岡八幡古墳	円墳	沖積平野	古墳	34	泉崎浦遺跡	集落跡・水田跡	沖積平野	縄文・古墳・平安・近世
14	砂押古墳	円墳又は前方後円墳	台地	古墳(中期)	35	山口遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	縄文~近世
15	金洗沢古墳	円墳	台地	古墳	36	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・平安
16	裏町古墳	前方後円墳	台地	古墳(中期)	37	下ノ内浦遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	縄文・弥生・奈良・平安
17	三神峯古墳群	円墳	丘陵	古墳	38	元袋III遺跡	集落跡	自然堤防	奈良・平安
18	教塚古墳	円墳	沖積平野	古墳(中期~後期)	39	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文~近世
19	大野田古墳群	円墳	沖積平野	古墳(中期~後期)	40	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・古墳・奈良・平安
20	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳	41	陸奥国分寺跡	寺院跡	自然堤防	奈良・平安
21	五反田古墳	円墳	自然堤防	古墳(中期~後期)	42	陸奥国分尼寺跡	寺院跡	自然堤防	奈良・平安

第1図 愛宕山横穴墓群の位置と周辺遺跡

縄文時代の遺跡には、大集落跡である山田上ノ台遺跡をはじめ、北前遺跡・三神峯遺跡・上野遺跡などがあり、これらはいずれも名取川北岸の段丘上に点在している。自然堤防上には、六反田遺跡・下ノ内遺跡・伊古田遺跡・下ノ内浦遺跡などがあり、この自然堤防上の地域は後世まで居住域として続いている。

弥生時代の遺跡としては、富沢遺跡の各地点から水田跡が検出されている。また西台畑遺跡からは中期の甕棺墓、下ノ内浦遺跡から後期の土坑・竪穴遺構が検出されている。しかしこの時期の集落はまだ発見されていない。

次に愛宕山・大年寺山からその南方に広がる郡山低地周辺について、古墳時代から奈良時代の遺跡を中心に概観してみたい。

古墳時代前期の集落跡としては、伊古田遺跡・六反田遺跡などがあり、竪穴住居跡が検出されている。墳墓では、この時期の方形周溝墓が安久東遺跡・戸ノ内遺跡で発見されているが、これらは名取低地に位置するものである。郡山低地においては、この時期の古墳・方形周溝墓は発見されていない。また広瀬川左岸の霞ノ目低地には、前方後円墳の遠見塚古墳がある。

古墳時代の中期になると、古墳もその数を増していく。兜塚古墳・砂押古墳・金洗沢古墳などが長町―利府構造線に沿って並んでいる。また、すでに削平されているが一塚・二塚・裏町古墳などの存在も明らかになっている。その他にも埴輪の採集される遺跡があることから、古墳はさらに多数存在していたものと考えられる。集落関連の遺跡でこの時期のものとしては、富沢遺跡から水田跡、下ノ内浦遺跡・泉崎浦遺跡から住居跡が発見されている。

古墳時代の後期になると、それまでの高塚古墳に代わって横穴墓の造営が盛んになり、奈良時代にかけて隆盛する。郡山低地に沿う青葉山丘陵の山裾斜面には多くの横穴墓が存在している。北から、愛宕山・大年寺山・宗禅寺・茂ヶ崎・二ツ沢・土手内の各横穴墓群があり、総数100基を超えると考えられている。また、仙台市内における横穴墓の分布は、ここ向山・西多賀地区と岩切地区（入生沢・台屋敷・東光寺横穴墓群）に集中している。これ以外では、燕沢地区（善応寺横穴墓群）、茂庭地区（向根・梨野横穴墓群）で確認されている。これらの横穴墓群の前方には平野部が開けており、横穴墓群の分布は大小の河川近辺であることが多い。さらに河川の自然堤防上には、横穴墓群の造営基盤である集落跡の存在が認められることが多い。

多くの横穴墓群が存在する青葉山丘陵の前方の郡山低地には、多賀城造営以前の官衙跡・郡山遺跡があり、横穴墓の造営とほぼ同時期であることから、その関連性がしばしば指摘されている。（第1図）

3. 愛宕山周辺の横穴墓群

愛宕山周辺には前述のとおり多くの横穴墓が存在するが、本格的な調査が行われたのは、1973

II. 遺跡の位置と環境

年の「愛宕山横穴墓群 B 地点」が最初である。これまでの調査結果を概観すると次のようになる。

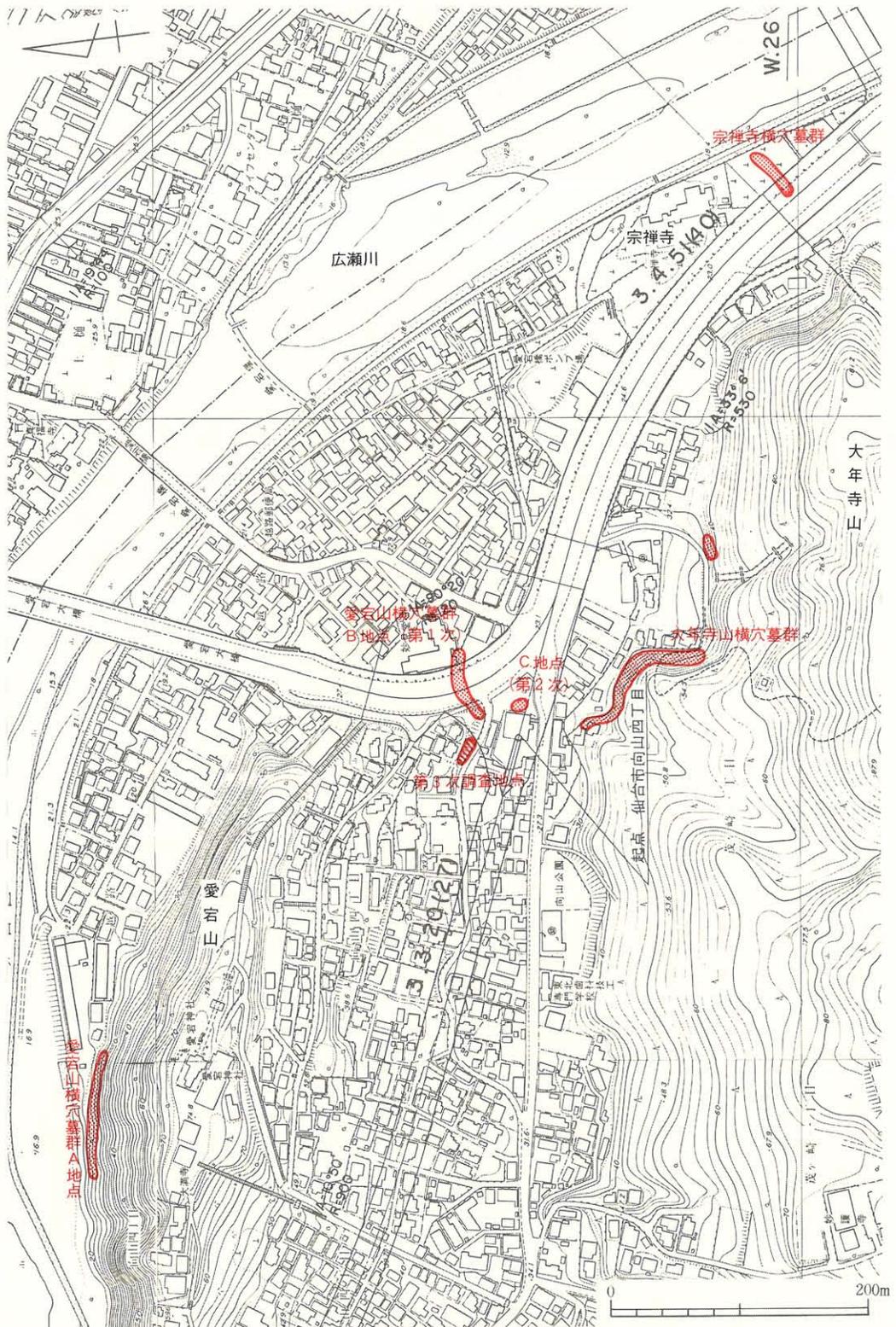
1973年「愛宕山横穴墓群 B 地点」の調査は、仙台市教育委員会によって行われた。横穴墓は少なくとも10基確認され、そのうち9基を調査している。確認された横穴墓のうちほとんどは変造を受けており、遺存状態は良好ではなかった。横穴墓の平面形は方形のものが多く、立面形はアーチ形（かまぼこ形）のものが多くとされる。また、袋状を呈す規模の小さい横穴の存在が報告されている。遺物では、腐蝕した人骨と副葬品とみられる須恵器（長頸壺）が出土している。構造や形態・出土遺物から、7世紀後半～8世紀頃の豪族の墳墓とされている。（岩淵：1974）

ついで1976年には「宗禅寺横穴墓群」の調査が仙台市教育委員会によって行われた。15基確認され、うち14基が調査されている。玄室から玄門・羨道・羨門・前庭という横穴墓の基本形態を備えている点で、愛宕山周辺の横穴墓群の中では、比較的遺存状況の良い横穴墓群である。平面形態は、隅丸方形・不整形・長方形など多種多様である。しかし台床を持つものが半数近くあることや、家形のものが多い点は注目される。また、工具痕跡がよく観察されている。遺物は、須恵器長頸壺・長頸瓶・平瓶・横瓶・提瓶・甕・土師器坏、刀子などが出土している。年代は、7世紀後半～8世紀とされている。（伊東・岩淵・田中：1976）

また同年、仙台市教育委員会によって行われた「愛宕山横穴墓群 C 地点」では、装飾横穴墓が発見された。装飾は平行線や丸十字文、円文などが玄室奥壁に描かれていた。平面形はほぼ方形で、立面形はドーム形の系統を引いた家形（宝形造り）である。また台床を持たない装飾横穴墓であり、愛宕山横穴墓群中で唯一の家形であることが報告されている。遺物では、人骨や土師器坏が出土しており、年代を7世紀後半（中葉に近い）の築造としている。また、多賀城以前の官衙跡である郡山遺跡との関連を指摘している。（結城：1985）

1988年には、宮城県教育委員会と仙台市教育委員会の合同で大年寺山横穴墓群の発掘調査が行われた。総計で26基の横穴墓が調査されている。その結果、平面形・立面形ともに多種多様な横穴墓が確認され、中には赤彩された装飾横穴墓も発見されている。また鉄刀や馬具などの金属製品が多数出土している。それをもとにした年代では、6世紀末～7世紀代の年代を与えている。そして、大年寺山周辺の横穴墓群を一括して「向山横穴群」とすることを提唱している。さらに、これらを造営した人々の政治的・経済的関係についても考察している。（進藤・佐藤・菊地：1990）

今まで実施した B 地点の調査を第 1 次、C 地点の調査を第 2 次とすると、今回の愛宕山横穴墓群の調査は第 3 次となり、総計18基の横穴墓が確認された。よって、周辺の横穴墓群と合わせると、確実なものだけでその数は、52基にのぼる。（第 2 図・註：2）



第2図 愛宕山周辺横穴墓群分布図

III. 調査の方法

本横穴墓群は北を愛宕山、南・西を大年寺山によって囲まれたわずかな平場に面している。広瀬川に向かって東にのびるこの地域は、旧地名が「大窪谷地」と称されており、北西方向から入り込んでいた小さな沢によって形成された痕跡がうかがえる。調査は、この大窪谷地に面する愛宕山の南西側斜面を対象に行った。

前述のとおり、この付近は、愛宕山横穴墓群 B 地点の一部にかかっていることから試掘調査を行ったところ、古代の横穴墓が確認された。

造成工事の事業計画によれば、当該地は、この愛宕山の南西側斜面を現在市道が走っているレベルまで削平し、平場を作り出す計画となっていた。このため確認された横穴墓は、そのほとんどが破壊されてしまうことから、記録保存のための本調査に移行することとした。

調査は、先に工事に着手する東半部から行った。当初、東半部では 6 基の横穴墓を確認したが、斜面上方むかって東側より、また上段を優先して 1～6 の番号を付した。さらに、2 号横穴墓の下に 1 基の横穴墓を発見し、これを 7 号横穴墓とした。その 7 号横穴墓と 6 号横穴墓の間に発見した横穴墓を 8 号横穴墓とした。

西半部の調査でも同じく、斜面上方むかって東側より 9～13 までの番号を付したが、調査中にさらに発見された横穴墓については、そのつど発見順に 14～18 までの番号を付した。

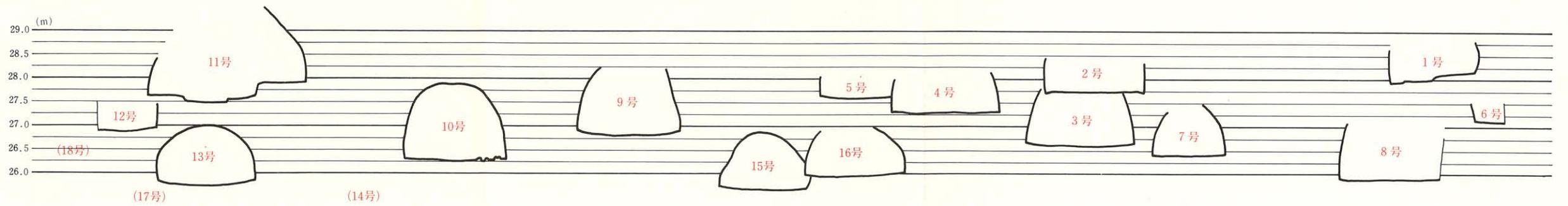
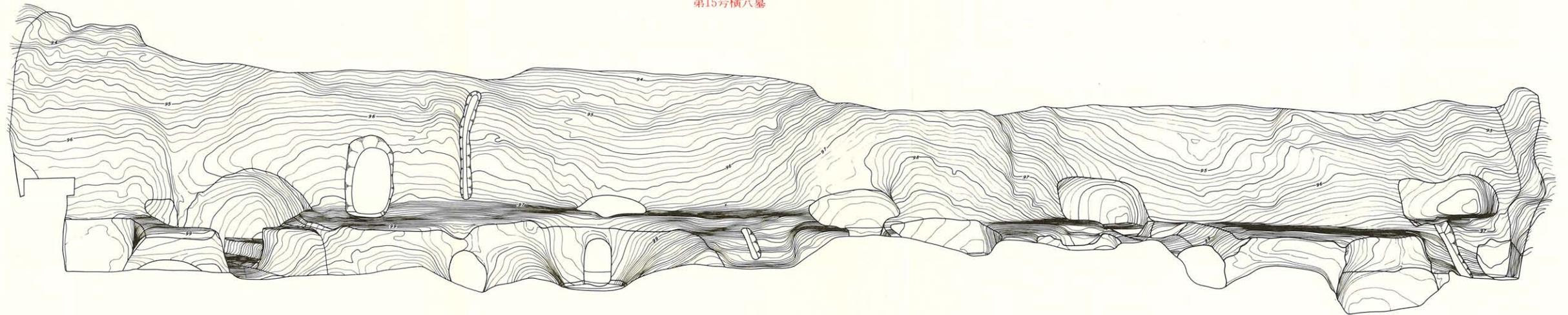
検出された横穴墓群は、総じてその遺存状況が悪く、また脆弱な基盤層で安全性の確保が難しかったこと等もあって、玄室内堆積土の観察・記録を十分に行うことができなかった。

出土遺物については、そのつど出土状況写真を撮影したり、1/20 の実測図を作成したりしたが、遺存状況の良くない遺物等に関しては、出土地点のみの記録にとどめたものもある。また、表面上発見されにくい玉類に関しても遺漏のないよう、玄室内堆積土の床面直上層をすべて採取し土壌水洗作業を行った。

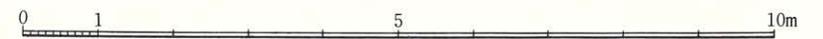
精査の終了した各横穴墓に関しては、1/20 の平面図・縦断面図・横断面図、また玄門部の遺存するものについては玄門立面図等の実測図を作成し、全景写真を撮影した。敷石の状況など、必要に応じて細部の写真撮影をしたものもある。しかし、壁面のノミ工具痕等については十分な記録化をすることができず、実測図に幅・長さ・方向を記録するにとどめた。

調査区全体の測量に当たっては、工事着工期日まで期間が限られていたことから写真測量とし、1/50 の遺構平面図と立面図を作成している。したがって、本報告書に記載している第 3 図・調査区全体図は、この実測図をもとにしたものである。

14号・17号・18号横穴墓に関しては、造成計画の掘削深度よりもさらに下にあることと、調査区外に延びることから精査は行わなかった。



第3图 調査区全体图



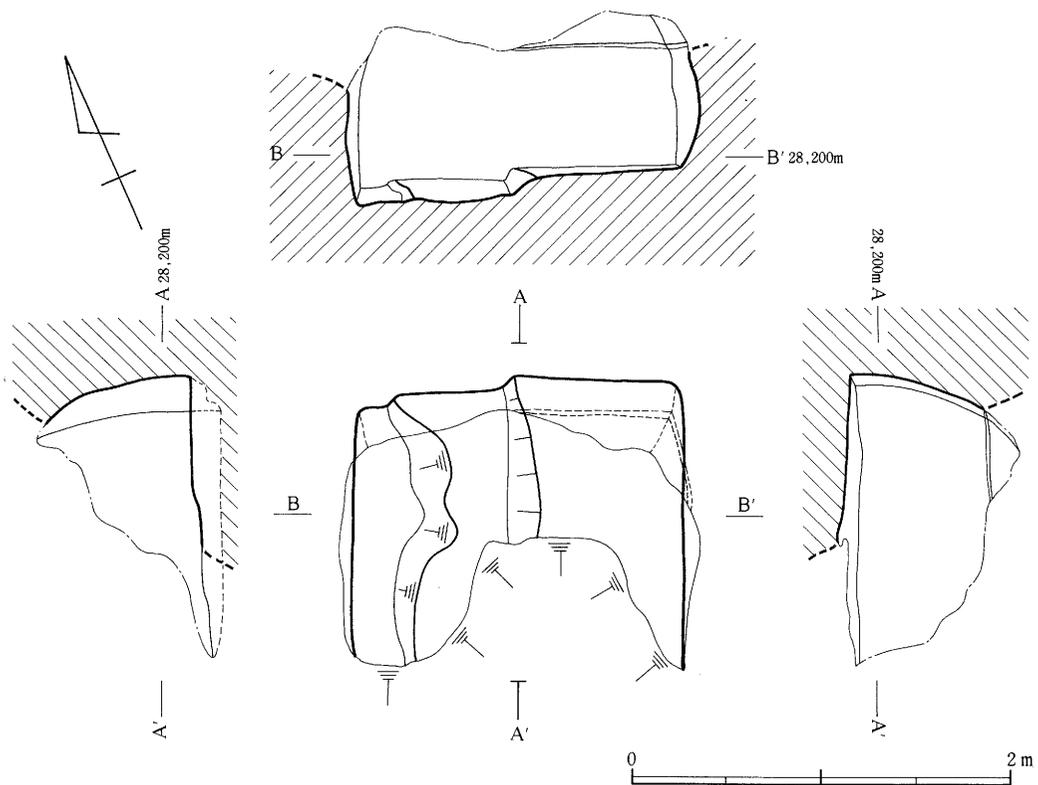
IV. 発見された遺構と遺物

今回の調査によって発見された横穴墓は、総計18基であるが、そのうち精査を行ったものは、14号・17号・18号横穴墓をのぞく15基である。

【第1号横穴墓】

今回の調査区の東端部、18基の横穴墓のうち最上部に位置する。玄室天井から玄門にかけて削平され、玄室の奥壁と床面の約1/2を残すのみである。羨道に至っては全く不明である。(第4図・写真図版3)

【玄室】 平面形は、方形あるいは長方形になるものと推定される。しかし、幅1.7mを計るほかは明らかではない。玄室の中軸線の方法は、N-22°-E(註：3)である。奥壁はやや内傾しながら立ち上がり、奥壁と側壁は稜線によって区画されている。また奥壁と側壁の残存部分には、約0.8mほどにわたり「軒回り」を表現したと思われるわずかなめぐり込みの線がある。このことから考えて、立面形は家形になるものと考えられる。床面の残存部分の右半部には、幅0.8mほどの台床が設けられている。また左側には、崩落のため上幅ははっきりしないが奥壁



第4図 1号横穴墓実測図

IV. 遺構と遺物

付近で底面幅14cm、深さ5cmほどの排水溝とみられる一段低い施設がある。これを排水溝と考えた場合の床面と台床のレベル差は、およそ8～10cmほどである。床面は、玄門方向に向かってわずかに傾斜している

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

【第2号横穴墓】

1号横穴墓から約7mほど西に位置している。1号横穴墓とは、玄室の床面で約0.3mのレベル差がある。玄室の天井部から羨道にかけて削平されている。しかし、玄室・玄門・羨道の平面形がわかることを考えると、今回の調査で確認されたものの中では、遺存状況が良好である。羨道の下には、7号横穴墓が構築されている。(第5図・図版4)

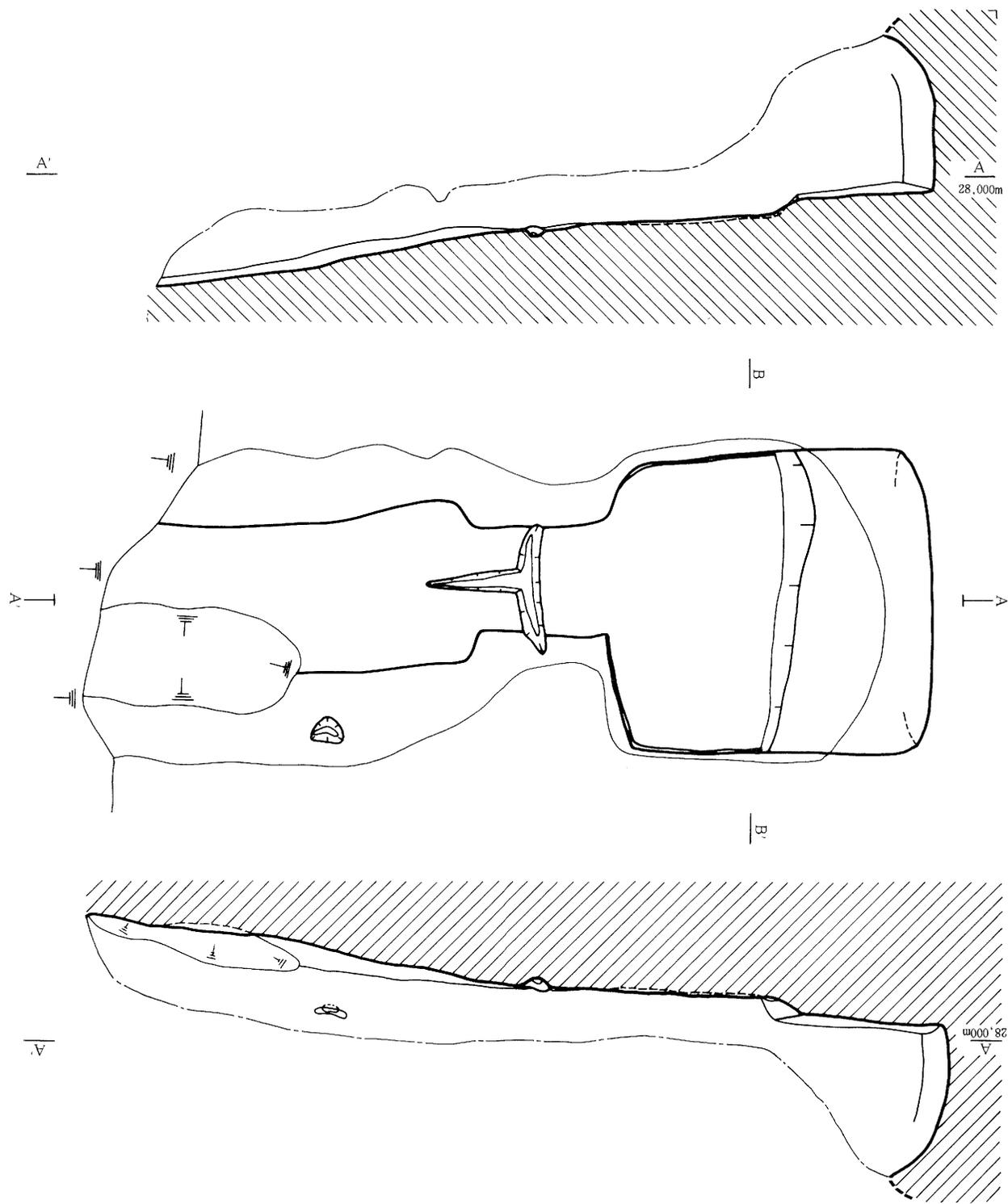
〔玄室〕 平面形は隅丸方形である。床面の幅は、奥壁付近で1.96m、玄門付近では1.7mほどになる。奥行は、2.1mである。また、玄門が玄室のやや左寄りに構築されているため左右対称ではない。中軸線の方法は、N-9°-Eである。立面形は、天井部が削平されているため明らかではない。しかし、奥壁と側壁が稜線によって区画されることや、その立ち上がり方が床面に対してほぼ垂直に近いこと、また、稜線が天井部に近づくとつれ不明瞭になることなどを考えれば、変形アーチ形と推定される。床面奥側には、幅0.9mほどの台床が設けられている。玄室床面積の約1/2を占める。縁の一部が崩落しているが、無縁台床である。台床の高さは、10～12cmほどである。その台床と床面との境から玄門にかけての周囲に、幅3～4cm、深さ3～5cmほどの断面V字形の細い溝が掘られている。また床面は、玄門方向に向かって緩やかに傾斜している。

〔玄門〕 玄室のやや左寄りに構築されているが、中軸線の方法は同じである。立面形は不明である。床面の幅は、約0.74～0.7m、奥行が約0.84mである。玄門のほぼ中央に幅15cmほどのT字形の溝がある。この溝を境に、床面の傾斜が羨道方向に向かってやや急になっていく。

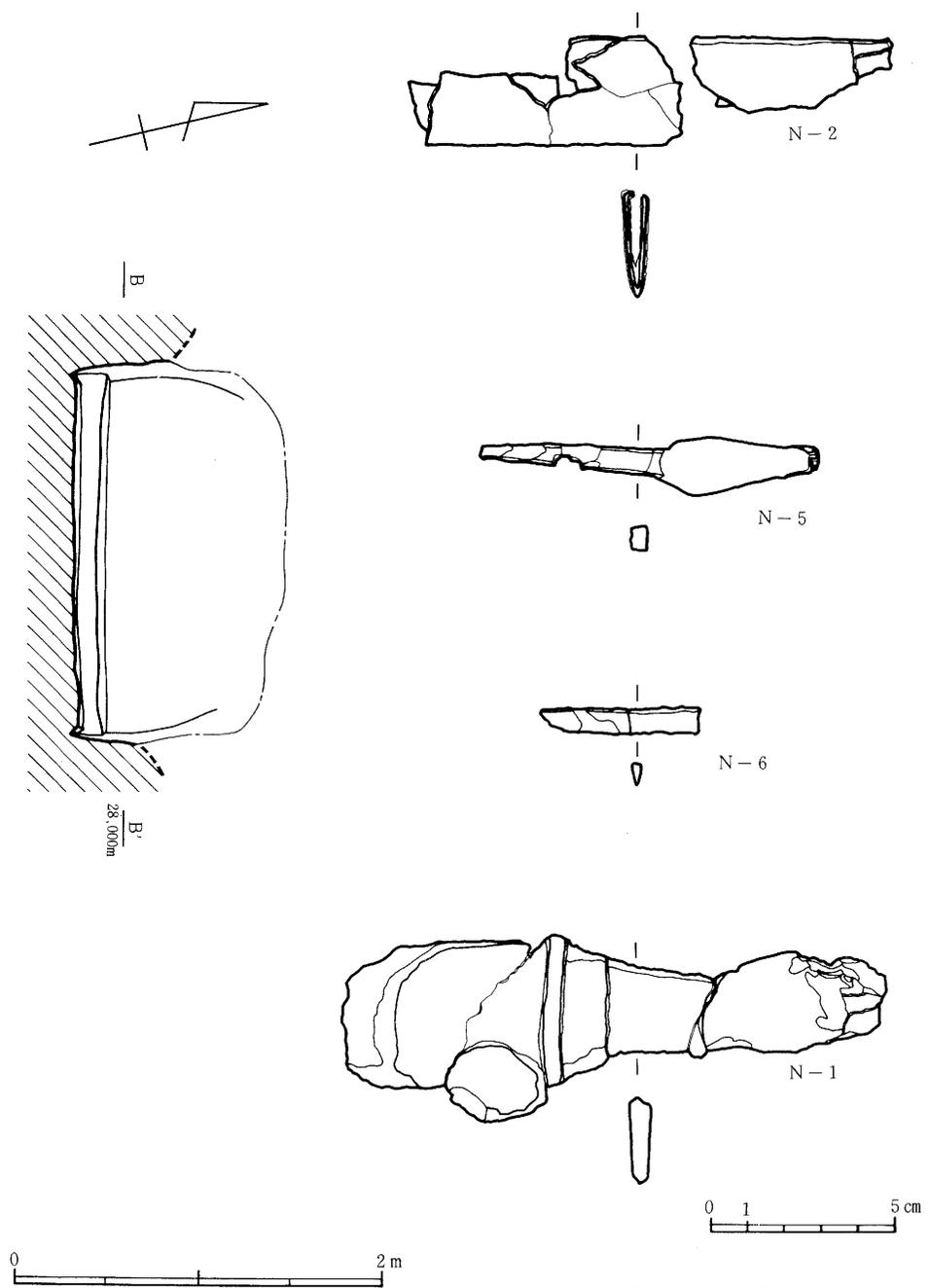
〔羨道〕 床面幅0.95m、奥行1.8m以上を計る。前方、上方は削平のため不明である。羨道の下位には、中軸線の方法をやや異にする7号横穴墓がある。削平あるいは崩落のため、7号横穴墓の天井部と貫通している。玄室床面でのレベル差はおよそ1.4mある。

〔出土遺物〕 玄室床面から直刀の莖部(N-1)、台床上から直刀の刀身部(N-2)が出土している。同じく台床上から鉄鏃の頸部(N-5)と鏃身部(N-6)が出土している。

直刀 2点出土しているが、いずれも部分的に遺存するのみである。N-1は、直刀の莖部、把縁金具の部分を残している。わずかに残る刀身部の断面から、平棟平造りであることが推定される。莖には、目釘孔に目釘が差し込まれた状態が確認された。莖の幅は20.9mmで、厚さ4.6mmである。N-2は刀身部分であるが、錆化が激しいため、どのあたりのものかはっきりしない。



第5图 2号横穴墓实测图



第5-1图 2号横穴墓出土遗物

残存する部分での最大幅28.6mm、厚さ6.3mmを計る。N-1とは幅や断面形などをみると同一の刀の可能性もある。

鉄鏃 N-5は鉄鏃の頸部であるが、篋被部と茎部の境が錆化のためわからない。残存長92mm、断面はほぼ長方形で、厚さが3.9mm以上である。N-6は刀身形の鉄鏃の先端部分である。残存長42.6mm、幅6.7mm、厚さ2.6mmである。(第5-1図・図版28)

【第3号横穴墓】

2号横穴墓よりやや西、玄室のレベルで約1.1m下に構築されている。玄室の天井部が削平されている。また、調査区の南を走る市道の下に延びており、精査したのは玄室の1/2まで満たないと思われる。市道の下になっている部分は、工事の際、危険防止のために埋められた可能性が高い。(第6図・図版6)

〔玄室〕 平面形は、奥壁付近の幅が玄門方向に向かって少しずつ狭くなっていく様相を見せていることから、台形になるものと思われる。幅は、残存部分の最大で2.24mを計る。中軸線の方向は、N-26°-Eである。立面形は、稜線が天井の中央付近に傾きながら延びていることや奥壁・側壁が内傾しながら立ち上がることなどから、変形ドーム形と推定される。奥壁と側壁には、幅8～12cmほどの工具痕が認められた。工具痕は、上から下にほぼ一定の間隔で施されており、最終的な整形による痕跡とみられる。奥壁・側壁の工具痕とも、上段・中段・下段とまとまる傾向にある。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

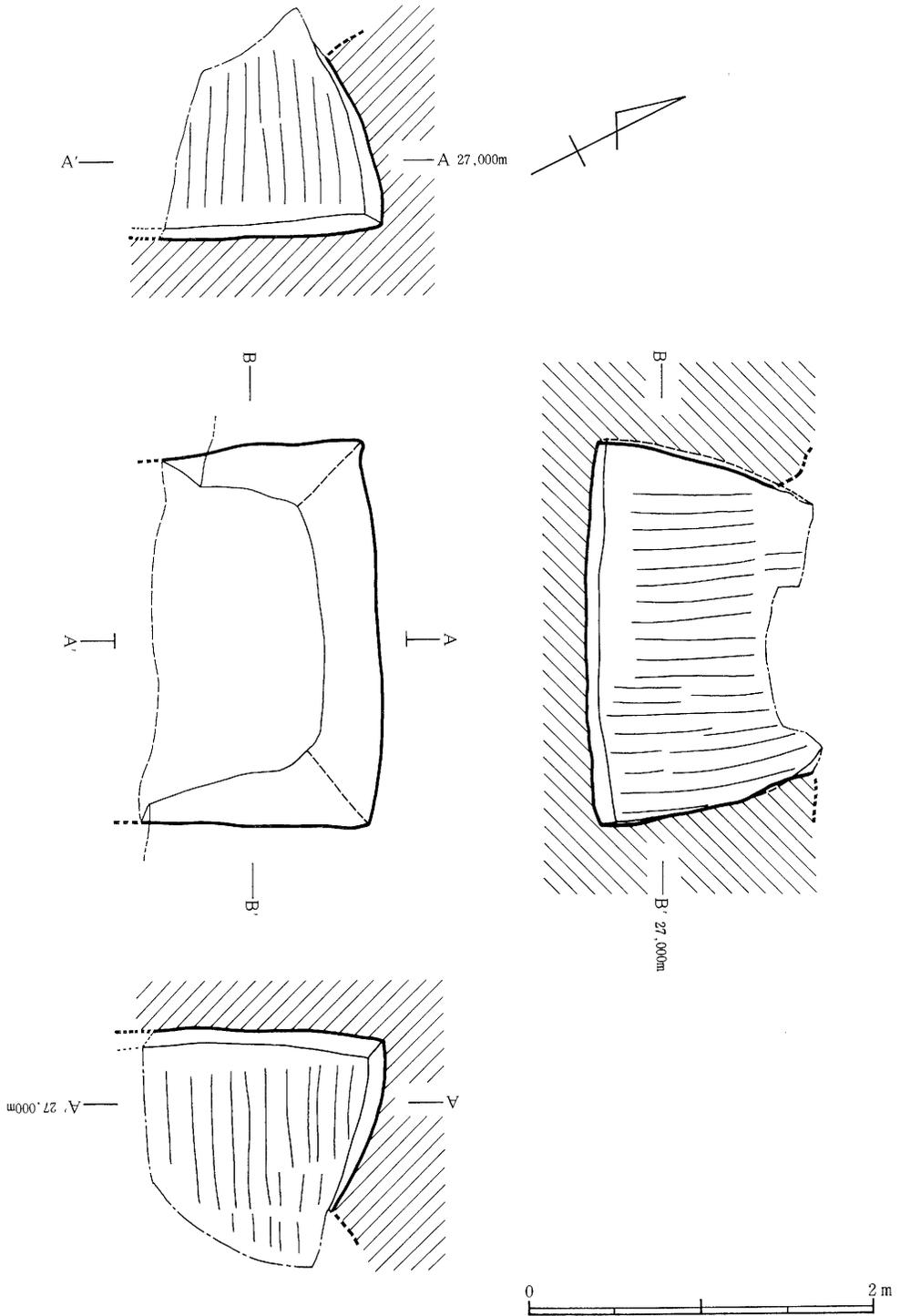
【第4号横穴墓】

3号横穴墓の西に隣接する。玄室床面のレベル差では、3号横穴墓より0.7m高い位置にある。玄室の天井部は削平されている。また、玄門から羨道は、市道の下に延びており、埋められた可能性が高い。(第7図・図版7)

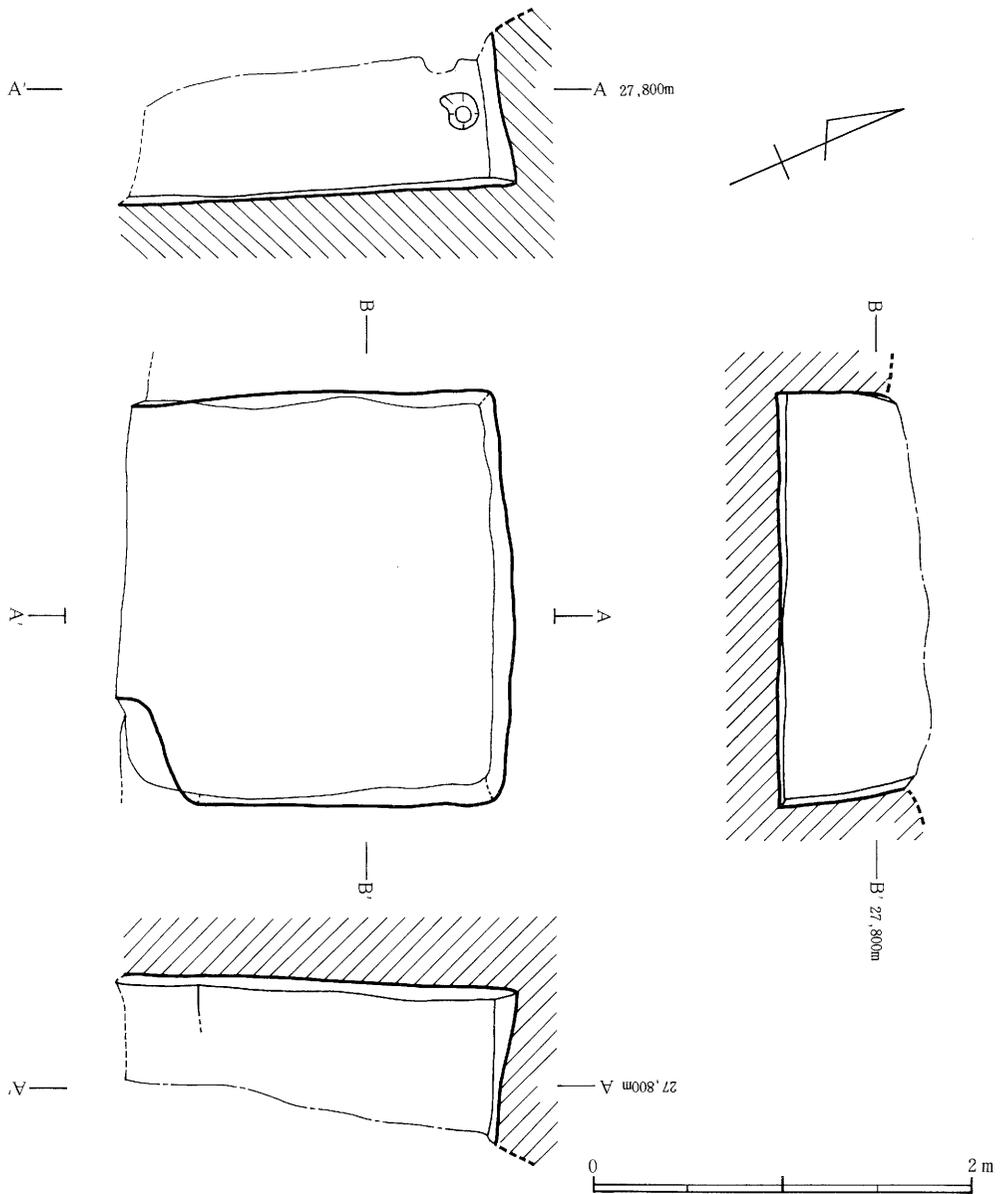
〔玄室〕 平面形は、方形になるものと推定され、幅2.16m、奥行1.6m以上を計る。側壁の右側ではすでに玄門への造り出しが行われているのに対し、左側の袖は、調査区外に延びており左右対称にはならない。中軸線の方向は、N-22°-Eである。立面形は、側壁がやや内傾しながら立ち上がっているのに対し、奥壁の傾きは床面に対して垂直に近いこと、また、稜線の立ち上がり方も床面に対してほぼ垂直なことから、アーチ形と推定される。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

IV. 遺構と遺物



第6図 3号横穴墓実測図



第7図 4号横穴墓実測図

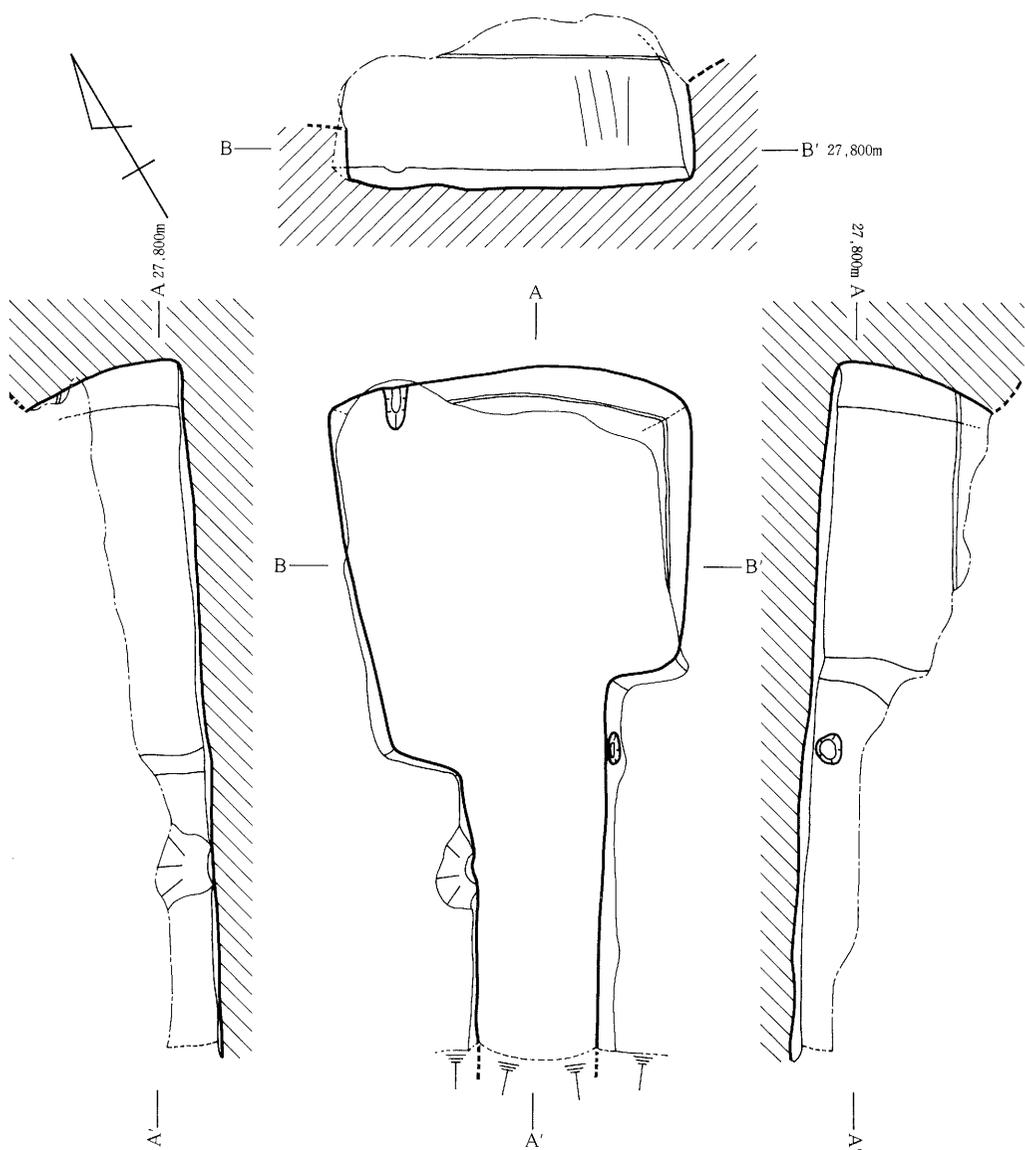
【第5号横穴墓】

調査区のほぼ中央部、2号横穴墓から5.5mほど西に構築されている。東には4号横穴墓が隣接し、そのレベル差は、およそ0.3mである。玄室の天井部から羨道にかけて削平されており、市道により南側は完全に失われている。(第8図・図版8, 9)

[玄室] 平面形は、やや歪んだ台形になっている。これは東に近接する4号横穴墓を意識して構築されたためと考えられる。また4号横穴墓玄室の左側の側壁と、5号横穴墓の羨道付近

IV. 遺構と遺物

の側壁とが貫通している。これは、構築時に貫通したのか崩落によるものかは明らかではない。しかし、玄室の歪みは4号横穴墓の存在によるものであると考えられ、明確な重複は認められないが、5号横穴墓の方が新しいとみられる。玄室床面の幅は奥壁側で1.9m、玄門側で1.5m、奥行が1.65m～2.1mである。床面は、玄門方向に向かって緩やかに傾斜している。中軸線の方法は、N-32°-Eである(註：4)。立面形は、奥壁と側壁が内傾しながら立ち上がり、天井部との境界線が彫り込んであることから、家形と考えられる。台床施設はない。また、奥壁の一部に幅10cmほどの工具痕がわずかに残っているのが確認された。床面の左側のコーナー付近には、幅14～8cm、深さ3～4cmほどの溝が検出されたが、その性格は不明である。



第8図 5号横穴墓実測図

【**玄門**】 玄門はない。

【**羨道**】 東に位置する4号横穴墓の規制を受け、平面形が歪んでいるとみられる。幅0.76～0.63m、奥行1.46m以上で、上部及び南側は削平のため失われている。また、左側壁の一部に半円筒状に張り出した部分があるが、右側には痕跡がないことから閉塞施設かどうか明らかではない。

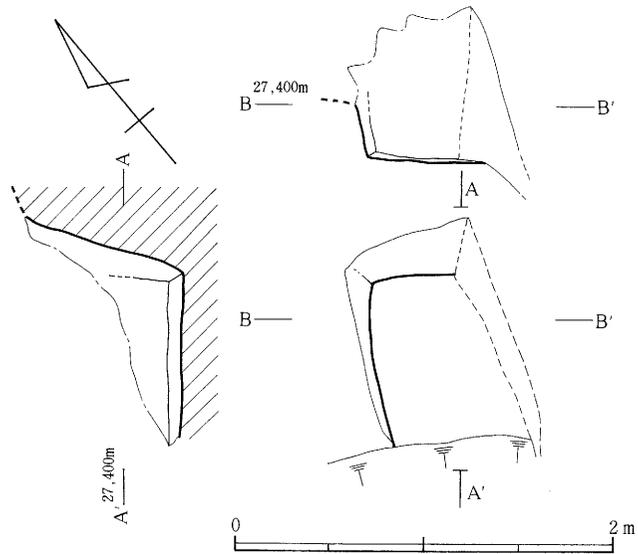
【**出土遺物**】 遺物は出土しなかった。

【第6号横穴墓】

調査区の東端部、1号横穴墓より玄室床面レベルで、0.9m下に構築されている。削平が著しく、一部の床面レベルを除き、形態・規模など全く不明である。

(第9図・図版10)

【**出土遺物**】 遺物は出土しなかった。



第9図 6号横穴墓実測図

【第7号横穴墓】

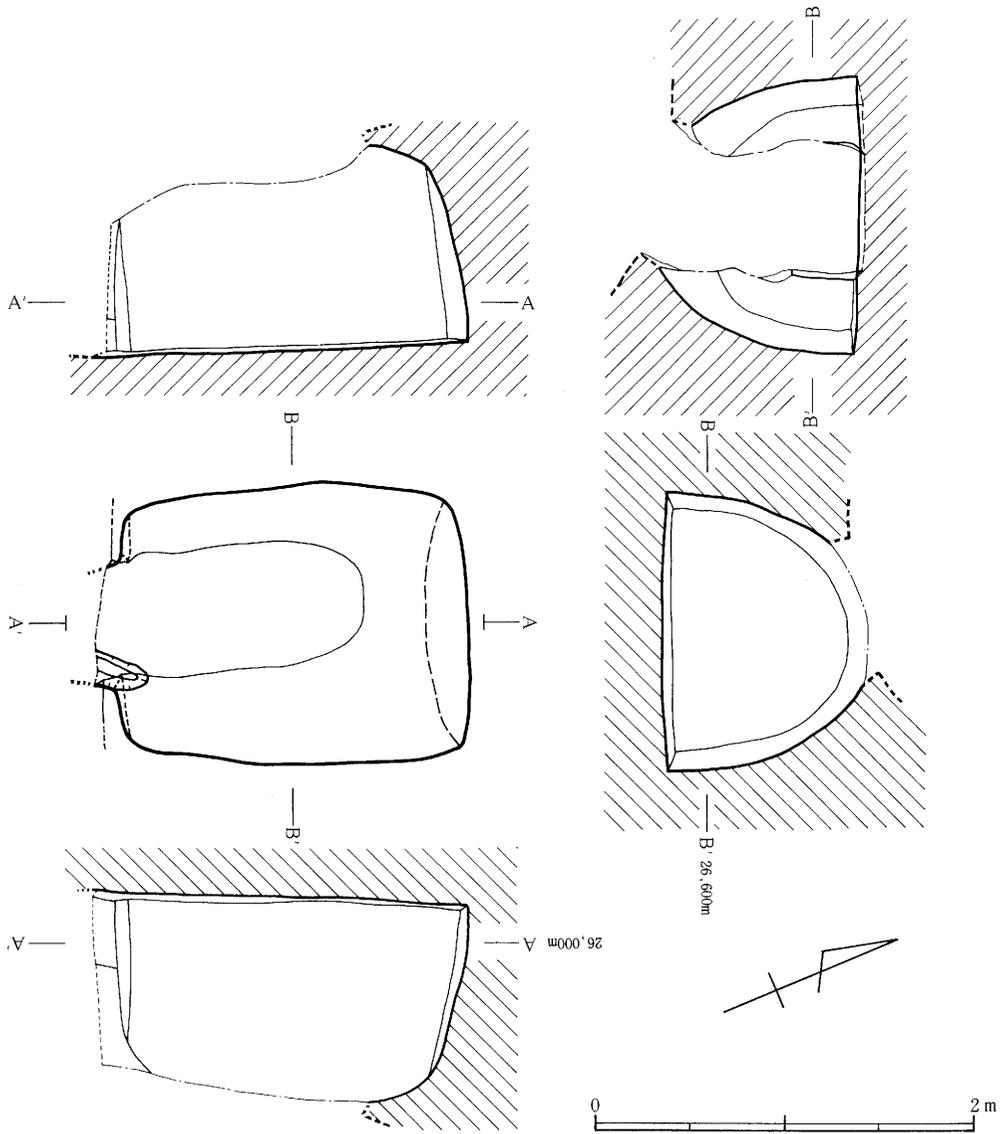
2号横穴墓よりやや東に位置している。2号横穴墓より玄室の床面レベルで、1.36mほど下に構築されている。玄室の天井部が崩落し2号横穴墓と貫通している。(第10図・図版11, 12)

【**玄室**】 平面形は長辺がやや膨らんでおり不整形を呈している。今回の調査で確認された横穴のうち玄室床面積のわかるものとしては、最も小さいものである。幅は、奥壁側で1.3m、玄門側で1.2m、奥行1.8mを計る。奥壁はやや内傾しながら立ち上がり、側壁と明瞭な境をなすが、側壁と天井部とは明瞭な境がないことから、立面形はアーチ形である。奥壁及び側壁には、最終的な整形段階で施されたとみられる工具痕跡がわずかに確認された。奥壁では上から下方向に、側壁では天井部の中心から床面方向に弧を描くように整形されている。

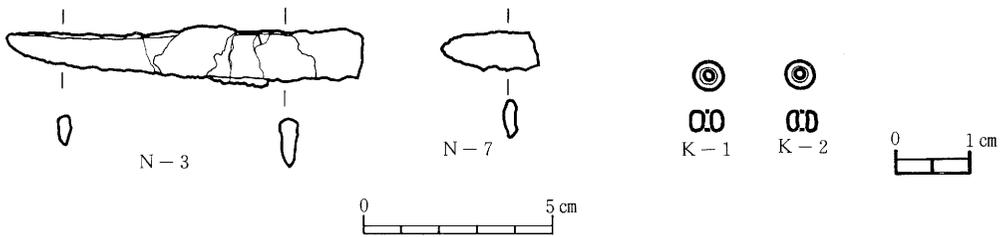
【**玄門**】 玄室のほぼ中央に位置している。幅0.66mを計るが、高さ・形状は削平されているため不明である。玄室との境に幅15cm、深さ7cmほどの溝があるが、その性格については不明である。

【**出土遺物**】 刀子(N-3)、鉄鏃の先端部分とみられる鉄製品(N-7)が1点出土してい

IV. 遺構と遺物



第10図 7号横穴墓実測図



第10-1図 7号横穴墓出土遺物

る。また、玄室床面直上の土壌サンプルを洗浄した結果、ガラス製小玉（K-1・2）が2点出土した。

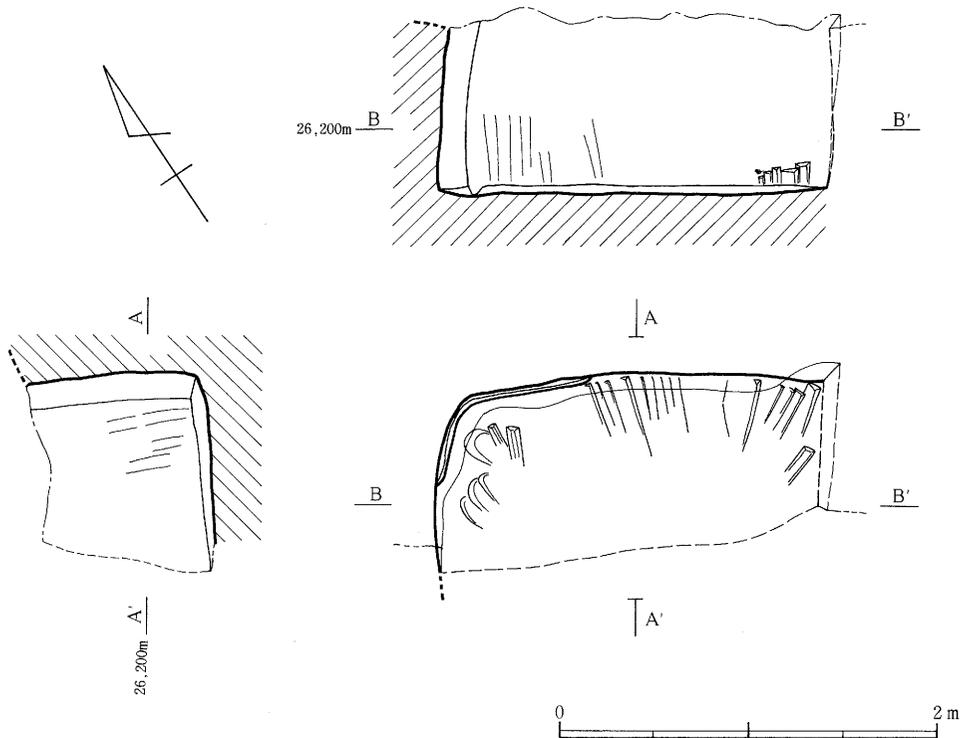
ガラス小玉 どちらも透明淡青色で、K-1がやや厚みがある。径3.9mm、高さ2.3mmである。K-2は、径3.8mm、高さ2.4~2.8mmである。重さは測定不能である。

刀子 N-3は、刀身の切先（フクラ切先）部分を遺存しており、残存長94mm、棟幅4.2mm、刀身幅12.4mmを計る。研ぎ減りと思われる箇所もあるが、錆化が激しいためはっきりとはわからない。

鉄鏃 N-7は平根形の鉄鏃とみられる。先端部のみを遺存している。残存長24.5mm、鏃身幅8.4mm、厚さ2.9mmを計るが、頸部は不明である。（第10-1図・図版30）

【第8号横穴墓】

1号横穴墓よりやや西下方に位置する。玄室の一部を残すのみであるが、床面に工具痕が比較的よく観察できる。玄門、羨道については不明である。（第11図・図版13, 14）



第11図 8号横穴墓実測図

IV. 遺構と遺物

〔**玄室**〕 玄室床面は、奥壁側で幅1.88m、奥行0.9mほどにわたって検出した。平面形は現況からは推定しがたい。奥壁に直行するように中軸線を想定すれば、その方向はN-35°-E前後になると思われる。床面には、荒削り段階のものともみられる工具痕跡が確認できる。ひとつは幅が6～8cmほどのもの、また、それよりも一回り小さく鋭利な痕跡を残すものがある。また、床面の左奥コーナー付近には、工具をえぐるように使用したとみられる痕跡が確認される。えぐるような痕跡と直線的な痕跡では、工具自体に違いのある可能性が考えられる。しかし、幅の違う痕跡については、工具の使い方の違いの可能性が考えられる。側壁及び奥壁の一部にも工具痕跡が確認されるが、これらは幅6cm前後で、上から下方向に規則的に並んでいることから、整形段階のものともみられた。立面形は、奥壁がわずかに内傾しているもののほぼ垂直に立ち上がり、稜線も奥壁同様に立ち上がることから、アーチ形とみられる。

〔**出土遺物**〕 遺物は出土しなかった。

【第9号横穴墓】

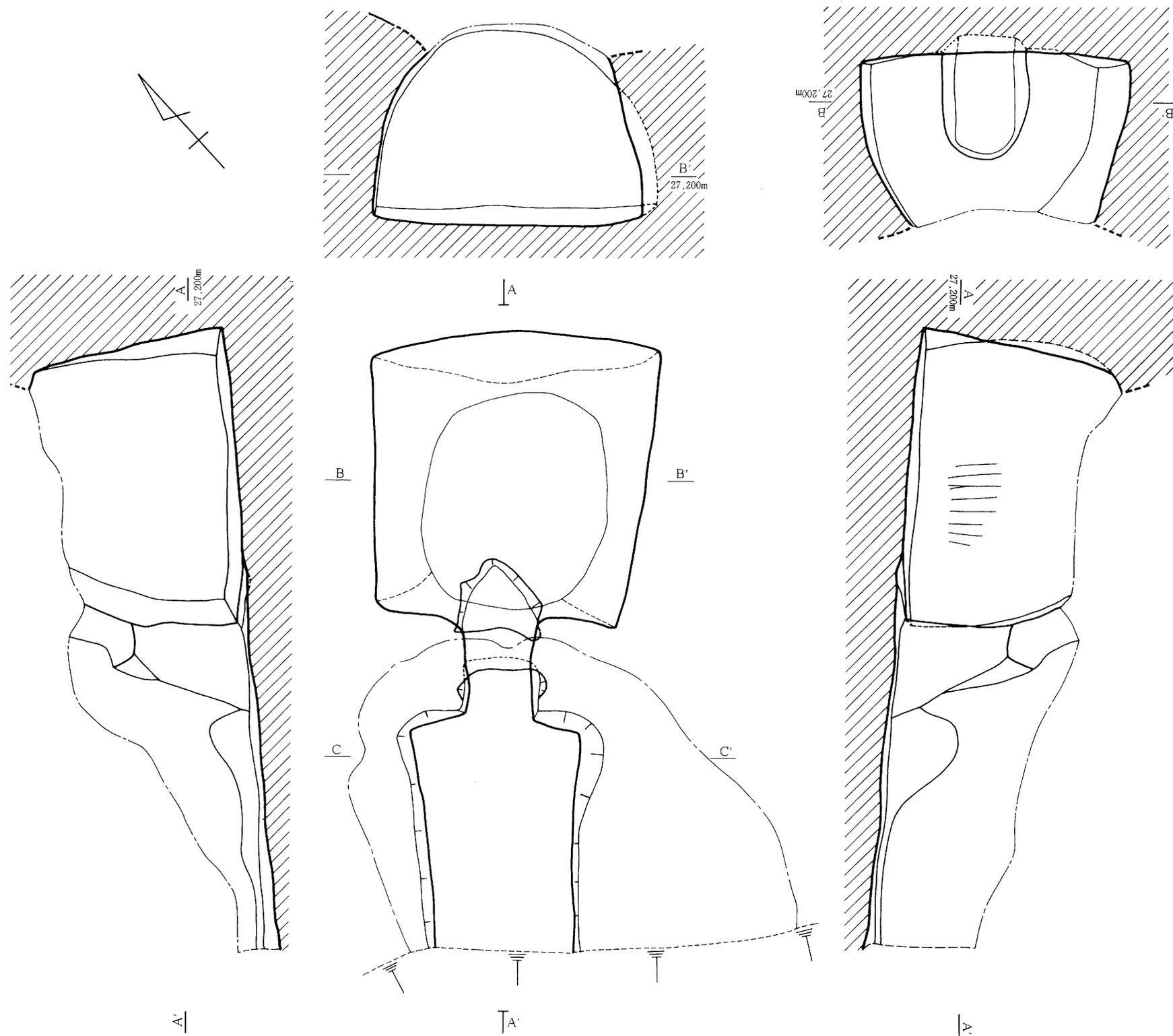
玄室・玄門・羨道の各部からなっているが、玄室の天井部と羨道の上部は削平のため不明である。(第12図・図版15, 16, 17)

〔**玄室**〕 平面形は台形である。幅1.94～2.26m、奥行2.2mを計る。中軸線の方向は、N-42°-E(註：4)である。床面には、幅5cmほどの工具痕跡が長いもので70cmにわたってみられた。また荒削りの痕跡とも考えられるくぼみが、玄室床面の右玄門側コーナーでみられた。玄室と玄門の境には、5cmほどの段差が設けられている。床面はほぼ平坦であるが、この段差を境にして開口方向に緩やかに傾斜している。奥壁は、やや内傾しているが直線的に立ち上がっている。また、奥壁と天井部とが稜線によって明確に区画されることから、立面形はアーチ形である。玄室の右側壁の一部には、整形段階での工具痕跡がわずかに確認された。幅10cmほどで、上から下方向である。

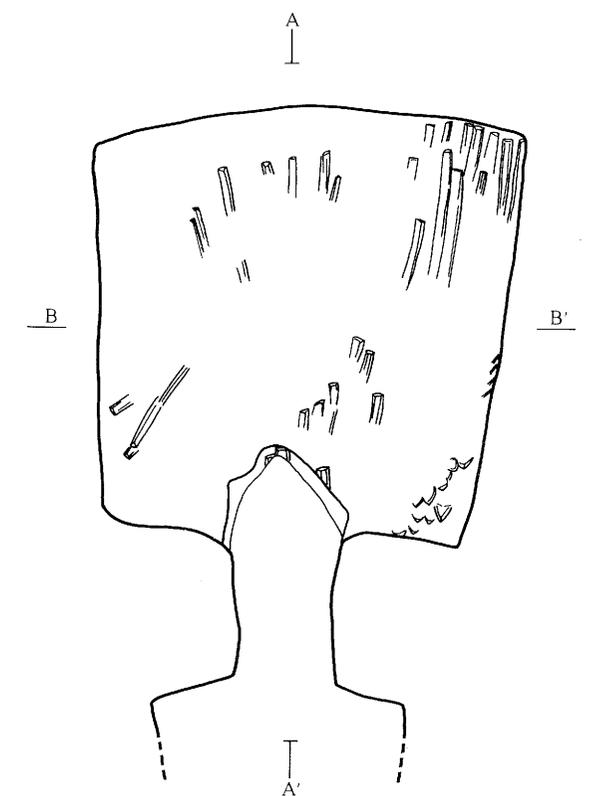
〔**玄門**〕 玄室のほぼ中央に位置している。しかし、玄室の中軸線と羨道の中軸線とは、わずかではあるがずれがある。よって厳密には、左右対称ではない。幅0.6m、奥行0.7m、高さ0.9mで、立面形はアーチ形である。

〔**羨道**〕 幅1.2m、奥行1.8mを検出しているが、南側は削平のため不明である。

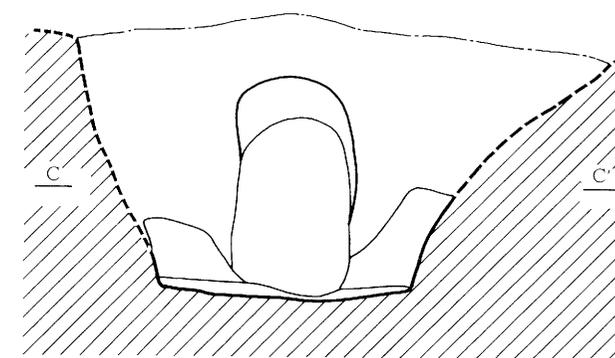
〔**出土遺物**〕 遺物は出土しなかった。

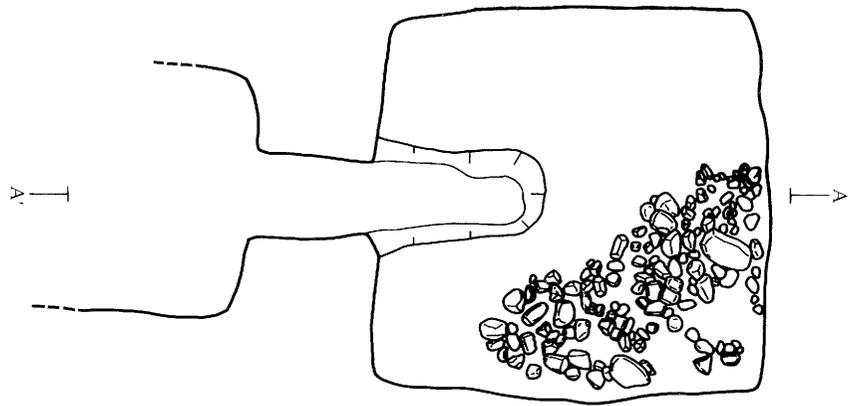


第12图 9号横穴墓实测图

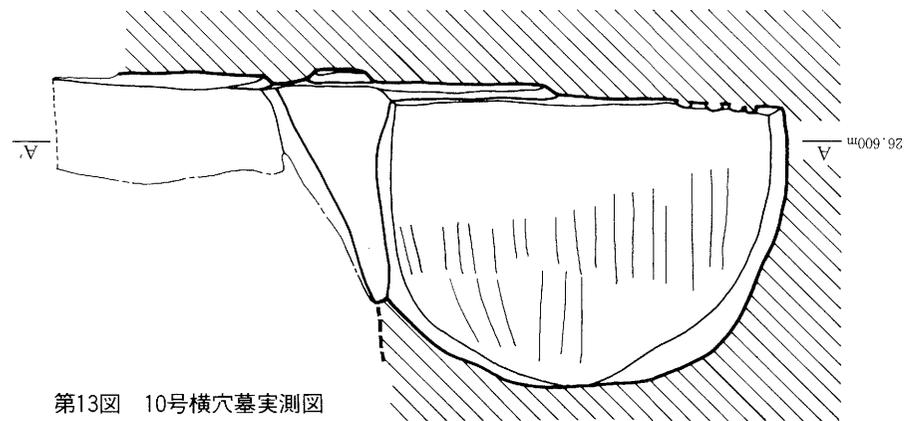
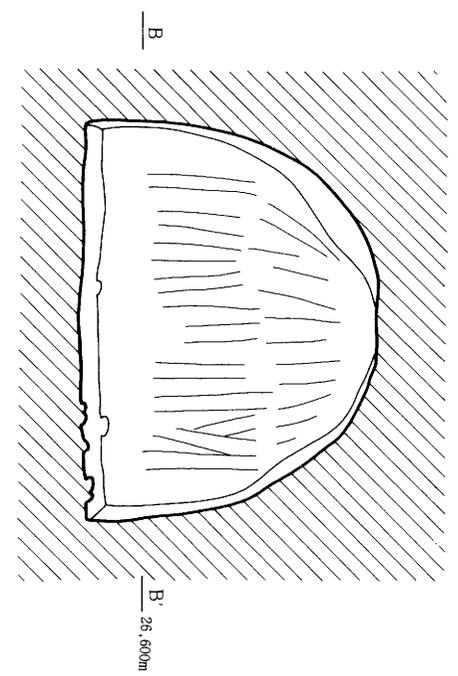
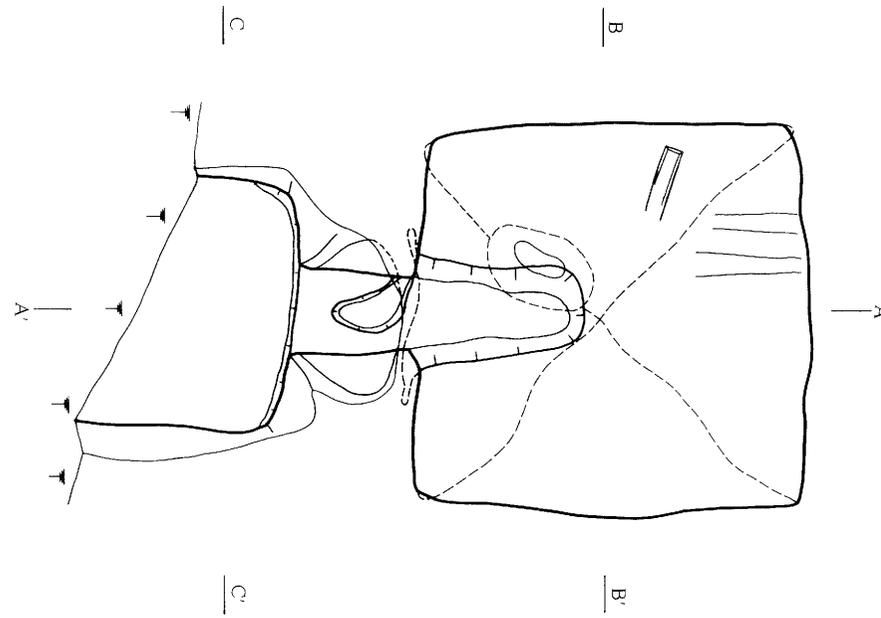
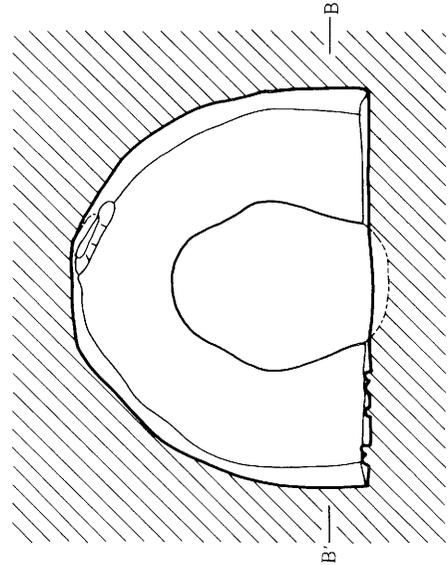
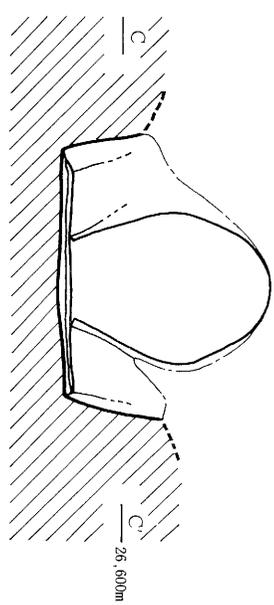
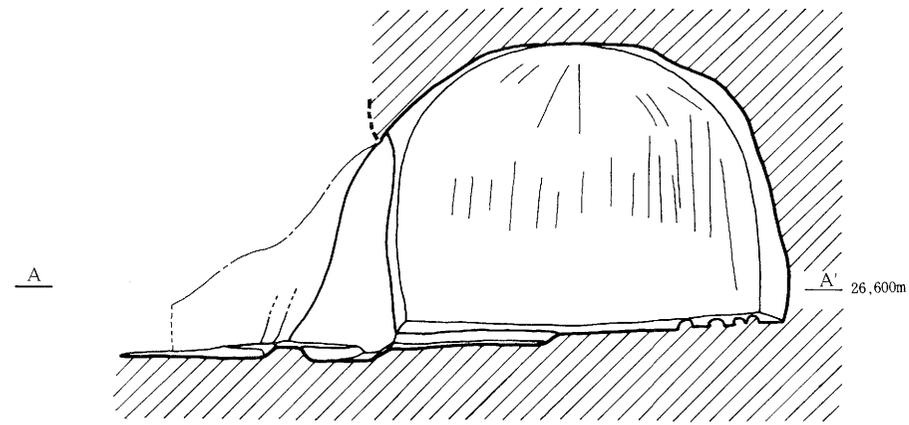


第12-1图 9号横穴墓女室内工具痕迹

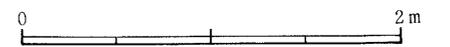




玄室内敷石検出状況



第13図 10号横穴墓実測図



【第10号横穴墓】

9号横穴墓の西側に位置し、玄室レベル差は、0.44mある。一部崩落しているが、玄室の天井部が残存している唯一の横穴墓である。玄室・玄門・羨道の各部からなるが、羨道の上部和前部は削平されている。(第13図・図版18, 19)

〔玄室〕 平面形は、幅・奥行ともに約2mで、ほぼ方形である。中軸線の方向は、N-15°-Eである。立面形は、奥壁と天井部に明瞭な境がないことや、四隅から延びた稜線が玄室天井中心部で交わることから変形ドーム形と考えられる。天井中心部の高さは約1.6mある。玄室床面中央から玄門にかけて、幅45cm、床面とのレベル差で6～8cm、奥行90cmほどの段差が設けられている。また、玄室内右奥には、こぶし大の円礫を中心とした石敷きがみられた。これが全域にあったものかどうかは不明である。玄室内左奥には、幅10cm、長さ60cmにわたって工具痕跡が確認された。奥壁と側壁にも工具痕跡が確認され、大きく上下2段に分けられる。上段の工具痕跡は、天井部の中心から放射状に施されている。下段は高さ80cm付近を境にして、上から下方向にほぼまっすぐに整形されている。天井部と奥壁には明瞭な境はないが、工具痕跡からみればそれぞれの境を意識して整形したものと考えられる。幅は、ともに10cmから12cm前後である。

〔玄門〕 規模は、幅0.45m、奥行0.6m、高さ1.1mである。立面形は、側壁が外側に膨らみながら立ち上がっているアーチ形である。玄室と玄門の境には、幅20cm、深さ6cmほどの溝状のものが確認されたが、性格については不明である。また、玄門と羨道とを5cmほどの段差を設けて区画している。

〔羨道〕 幅1.3mを計るほかは、削平のため不明である。玄室・玄門・羨道ともに床面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 須恵器の破片(E-1)が1点出土している。

須恵器片 E-1は、壺の体部下半の破片とみられる。破片の外面上部にはロクロ目の成形痕が明瞭に残っている。下半にはわずかではあるが、手持ちヘラ削りによる調整痕が残っている。焼成は非常に良好で、胎土には黒色粒・微砂粒を含み、外面には白色の自然釉がわずかに付着している。(図版32)

【第11号横穴墓】

10号横穴墓より西に1.8m、玄室床面レベルで、約1.1m高い位置に構築されている。10号横穴墓とは、玄室での中軸方向をほぼ同じにする。玄室・玄門・羨道の各部からなるが、玄室天井部の大部分と奥壁、また玄門と羨道の上部は削平されている。羨道の延長部については現存していない。(第14図・図版20)

IV. 遺構と遺物

〔**玄室**〕 平面形は、幅が奥壁側で3 m、玄門側で3.3m、奥行が2.5m ほどの長方形を呈している。玄門と羨道の中軸線を考えた場合、東の方にかなり張り出した形になっており、左右対称ではない。中軸線の方法はN-12°-Eである。奥壁と側壁は稜線によって区画され、ともに内傾しながら立ち上がる。また、奥壁と側壁の一部に、「軒回り」を表現したと思われる明瞭な段がある。この段を境にして、稜線は天井の中心付近に向かって延びている。このようなことから、立面形は家形であると考えられる。床面には左に1つ、右に2つの台床施設が造り出されている。右側の高位の台床と低位の台床との高低差は約26cmほどある。また床面と低位の台床との高低差は、6～8 cmである。左側の台床の一部は崩落しているが、床面との高低差は6～8 cmである。台床の幅は、左が0.8m、右の高位が0.8～1 m であるが、右の低位は0.55m ほどである。床面は、わずかではあるが緩やかに玄門方向に向かって傾斜している。台床は、左右ともにほぼ平坦であるが、わずかに中央付近が低くなっている。

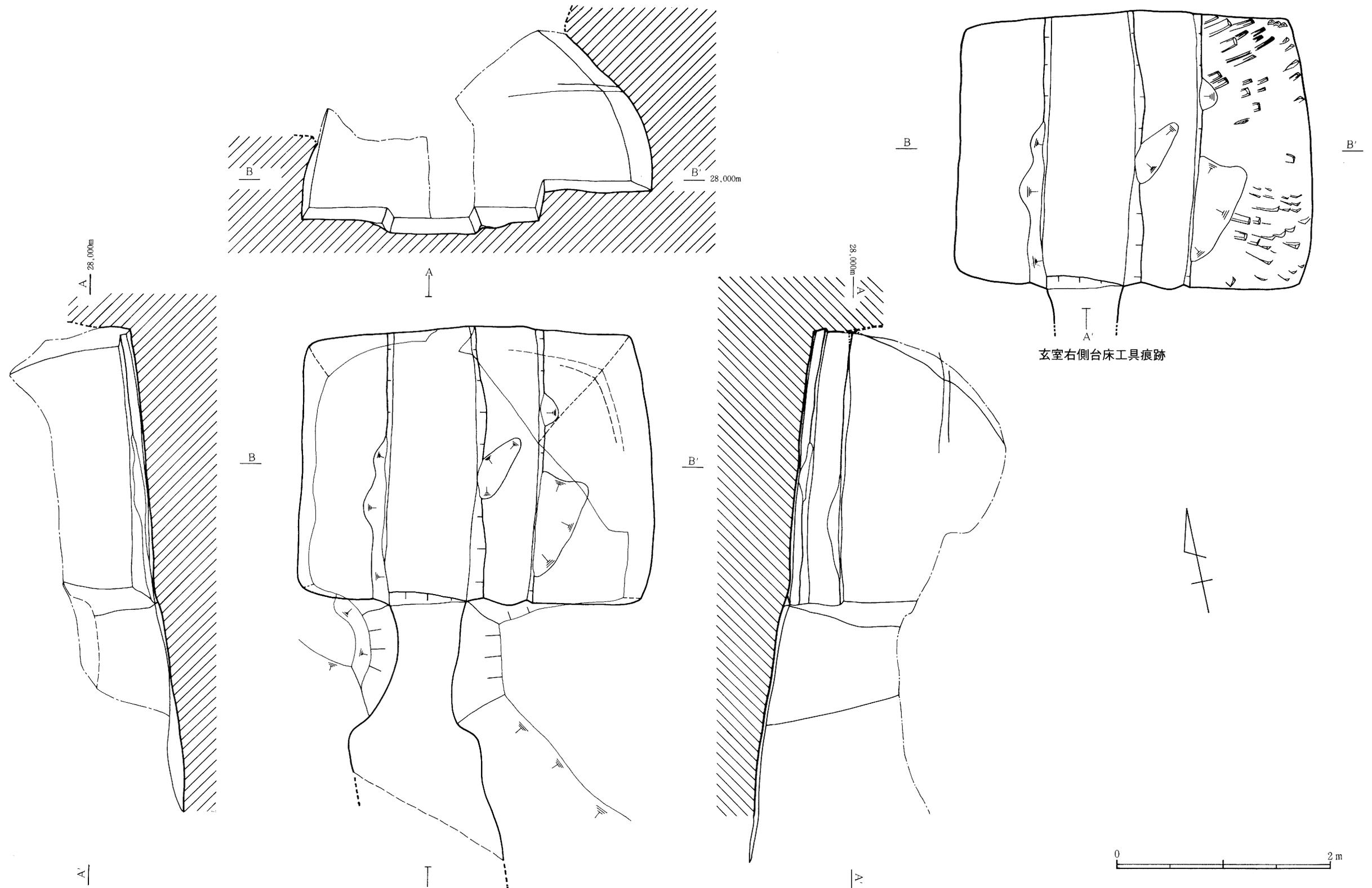
また、右側の高位の台床には、荒削り段階のものと思われる工具痕跡が確認された。工具痕跡は、大きく3種類認められる。ひとつは、幅8 cmほどで、長さが15～26cmにわたるもの。また、幅がそれよりも狭く3～4 cmほどのもの。そして、コーナー付近で見られるキザミ状あるいは刺突状の痕跡である。これらは、工具の違いか使用法の違いか、はっきりと確認できなかった。

本11号横穴墓は、玄室の平面形が横に張り出した長方形となっており特殊である。しかし、低位の台床のみを考えた場合には、玄門は左右の台床のほぼ中央付近に位置することになり、平面形も左右対称で自然である。台床の高さも高位が26cmであるのに対し、左右ともに6～8 cmであり同じ状況を呈する。また高位の台床のみに工具痕跡が確認されている。これらのことから、本横穴墓の玄室は、改築（拡張）されたと考えられる。すなわち、古い段階と考えられる玄室は、左右対称に高さ6～8 cmの台床を設けているもの（11号横穴墓（古））である。また、新しいと考えられる玄室は、右側の高位の台床をさらに造り出した段階のもの（11号横穴墓（新））であり、2段階あるものと捉えておきたい。

〔**玄門**〕 幅0.55～0.7m、奥行が1 m ほどあり、中央付近でやや幅を狭くしている。玄室と玄門との境には、6 cmほどの段差が設けられている。玄室床面から羨道方向に向かって緩やかに傾斜しているが、この段差を境に傾斜がやや急になっている。

〔**羨道**〕 幅1.2m を計る。玄室・玄門の中軸線と羨道の中軸線との間には、かなりのずれが生じるものと思われる。羨道は、玄門から連続して緩やかに傾斜している。

〔**出土遺物**〕 遺物は出土しなかった。



第14图 11号横穴墓实测图

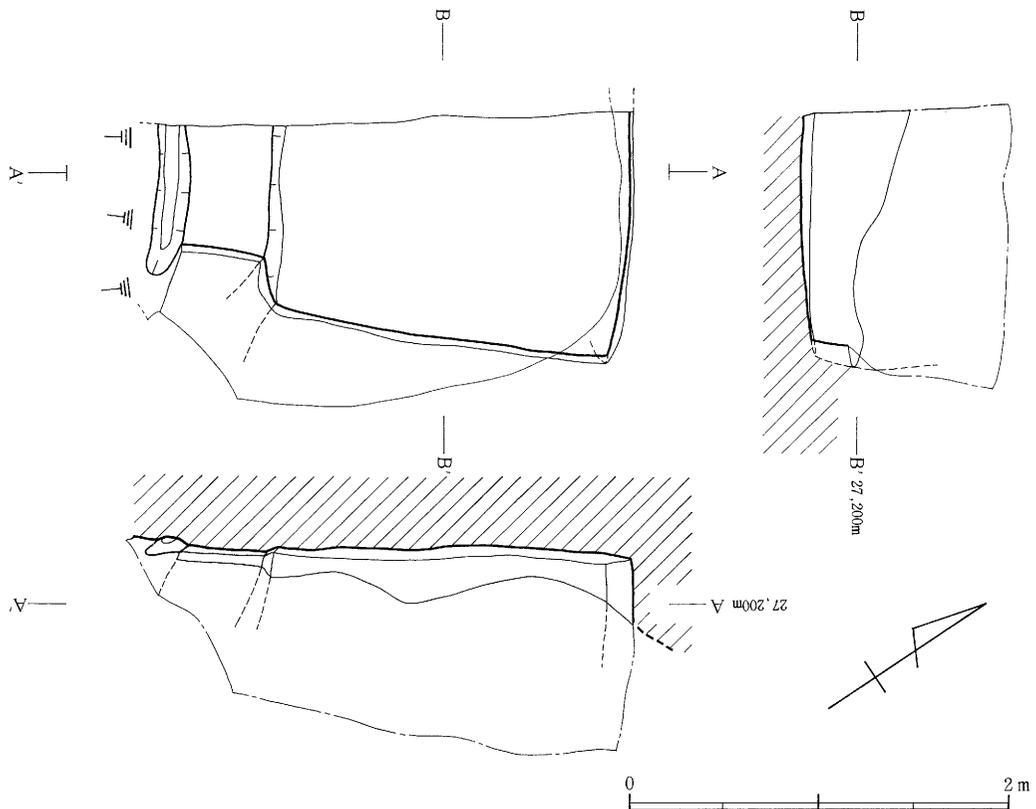
【第12号横穴墓】

今回の調査区の西端部に位置する横穴墓である。11号横穴墓・13号横穴墓と隣接し、11号横穴墓の玄室床面と比較すると、およそ0.6m下に構築されている。玄室と玄門床面の約1/2を検出した。(第15図・図版21)

【玄室】 平面形は、台形を呈すると考えられる。中軸線の方法は、N-38°-Eである。奥行1.8mを計る。床面はほぼ平坦であるが、玄門の床面よりもわずかに一段低くなっている。奥壁は現存部分では床面に対してほぼ垂直に立ち上がり、稜線も奥壁と同様にわずかに延びているが、立面形は不明である。

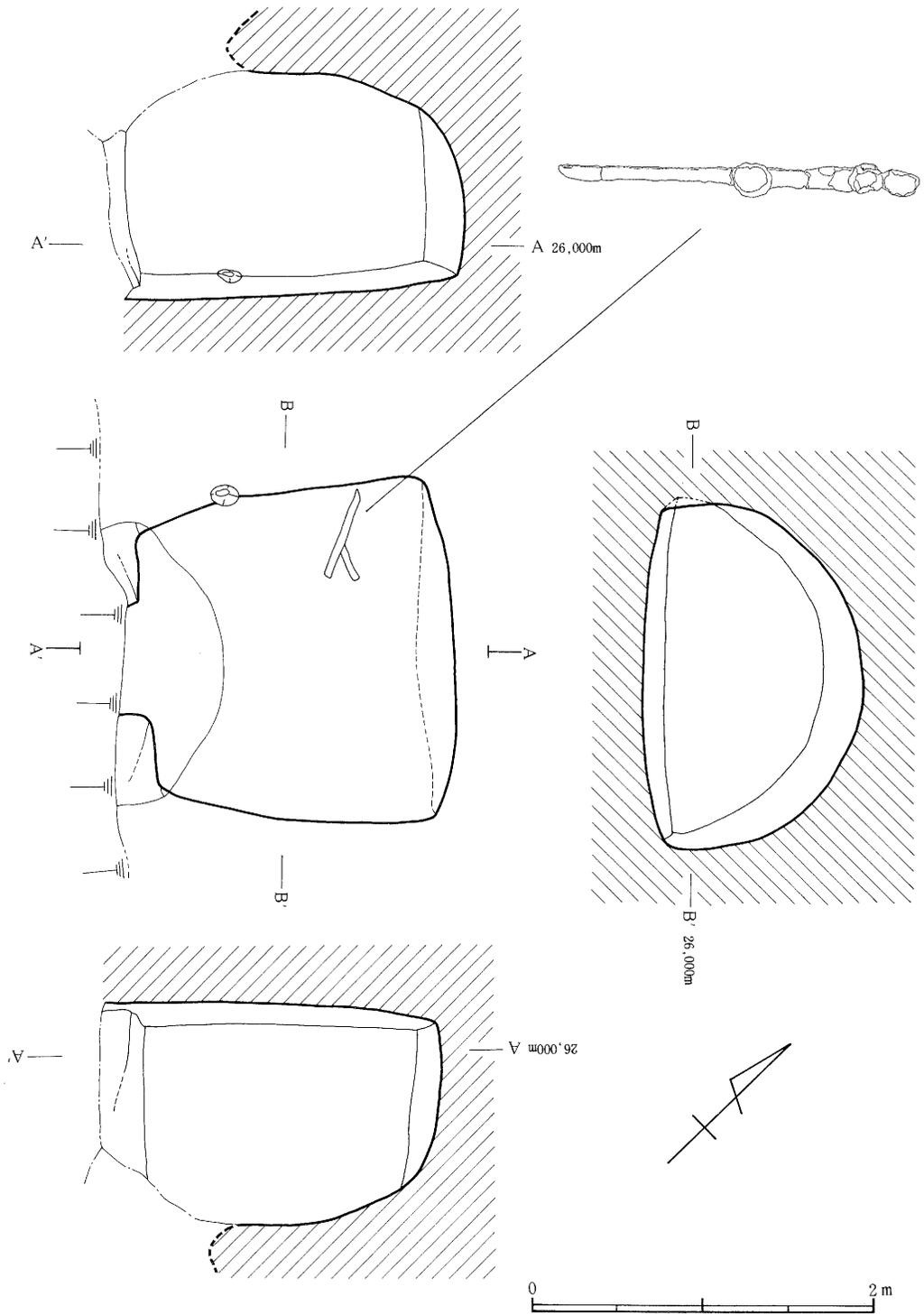
【玄門】 奥行0.4mを計る。床面が玄室のそれより3~4cmほど高くなっている。また羨道方向にわずかに傾斜している。調査区の南端では、幅15cm前後、深さ5cmほどの溝を0.8mにわたり検出した。検出位置からみて玄門と羨道との境界にあたりと考えられ、閉塞施設に伴うものとみられる。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。



第15図 12号横穴墓実測図

IV. 遺構と遺物



第16図 13号横穴墓実測図

【第13号横穴墓】

11号横穴墓と12号横穴墓の中間に位置し、12号横穴墓よりも玄室床面のレベルで約1.2m下に構築されている。玄室の天井部がほぼ遺存している。玄門と羨道は、市道の下に延びていくが削平された可能性が高い。

(第16図・図版22)

【玄室】 平面形は台形を呈する。幅は、奥壁側で2m、玄門側で1.5m、奥行1.8mである。中軸線の方向はN-40°-Eである。玄室の床面は玄門方向に向かって緩やかに傾斜している。奥壁は天井部と明瞭な稜線によって区画されている。しかし、全体的にみると奥壁は天井部に向かって丸みを帯びながら立ち上がっており、天井部もドームのように丸みを持つことから変形アーチ形と考えられる。高さは、1.3mほどである。13号横穴墓の西下方には、17号横穴墓が存在することが確認された。13号横穴墓の左側壁沿いの床面と17号横穴墓の側壁上部とが貫通している。これは崩落によるものである。

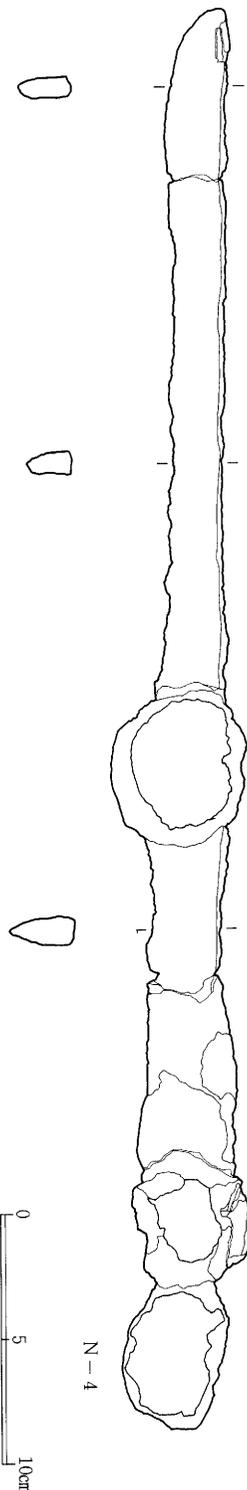
【玄門】 幅0.6mを計るほかは不明である。

【出土遺物】 須恵器の破片(E-2)が出土している。また、玄室床面の左奥から、直刀(N-4)が1点出土している。

須恵器片 E-2は、須恵器甕の体部の破片と考えられる。外面には、格子叩き目、内面には細い木目状の圧痕のある同心円の当て具痕が残っている。胎土には、黒色粒・白色微砂粒・石英粒・白針状繊維を含み、E-1とは焼成の面でも違いがみられる。(図版33)

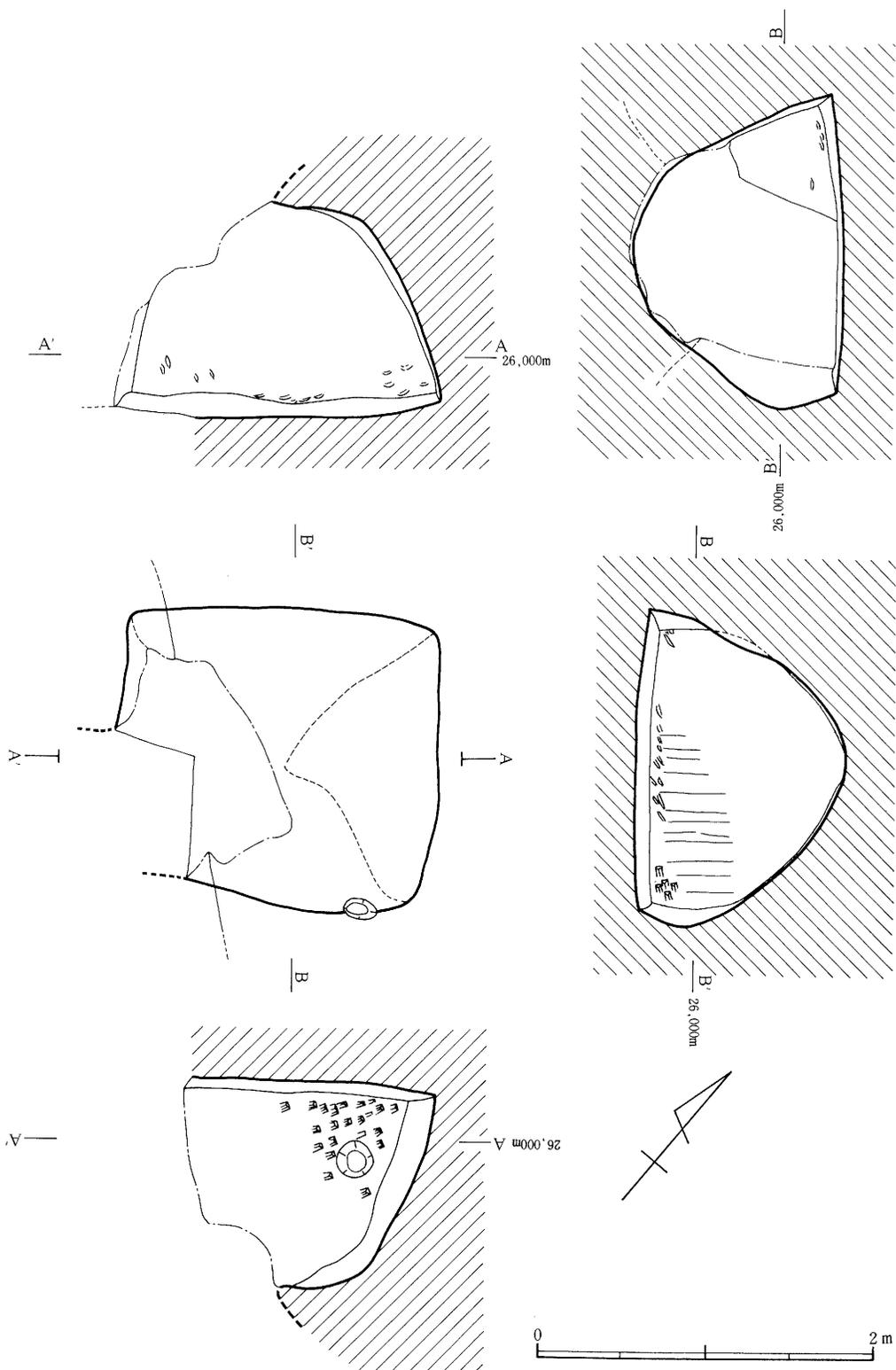
直刀 玄室床面から平棟平造りの鉄刀の刀身部(N-4)が出土している。調査当初は2点と思われたが、接合することが判明した。残存長570.5mm、棟厚8.5mm、刃部の最大幅25mmを計る。刀身部と茎部の境は、錆化のためはっきりしない。先端はフクラ切先である。

(第17図・図版29)



第17図 13号横穴墓出土遺物

IV. 遺構と遺物



第18図 15号横穴墓実測図

【第14号横穴墓】

10号横穴墓と11号横穴墓の間に位置しているが、削平深度よりも下にあることと市道の下に延びることから、精査不能であった。(図版23)

【第15号横穴墓】

玄室の大部分を遺存しているが、玄門・羨道に関しては削平のため不明である。今回の調査で確認されたものの中で、最も低い位置に構築された横穴墓である。(第18図・図版24)

【玄室】 平面形は、一部未検出であるが隅丸方形になると考えられる。奥壁側の幅が1.61m、奥行が1.8mほどある。床面がやや丸みを帯びており、中央付近が低くなっている。中軸線の方法は、 $N-50^{\circ}-E$ である。奥壁は内傾しながら立ち上がる。また側壁とは稜線によって区画されているが、天井部との明瞭な境は見られない。天井部がわずかに平坦になる部分があることも含めると、立面形は変形ドーム形と考えられる。高さは1.26mである。奥壁には、幅8～10cmほどのものと幅5cm前後の2種類の工具痕跡が確認された。幅の広いものは、高さ0.6m付近から上から下に向かって一定の間隔で施されていることから整形段階での工具痕跡とみられる。また5cmほどのものは、奥壁コーナー部に残されていることや不規則であることなどから、荒削り段階での工具痕跡が消されずに残ったものと考えられる。右側の側壁にも工具痕跡が確認され、鋭い刃痕をキザミ状に残している。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

【第16号横穴墓】

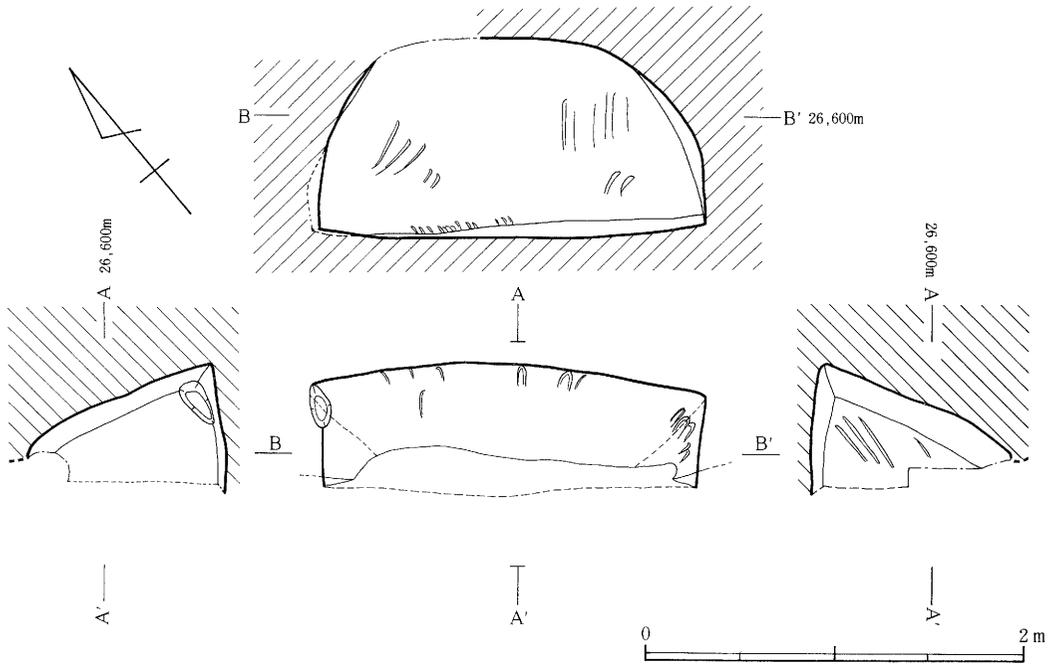
5号横穴墓より玄室床面レベルで1.6mほど下に構築されている。また15号横穴墓の東に隣接し、玄室の左奥で15号横穴墓と貫通している。玄室の奥壁付近と床面の一部を残すのみである。(第19図)

【玄室】 平面形は、奥壁側の幅がわずかに狭まりながら玄門方向に延びていく様相を呈していることから、台形になると推定される。幅2.08m、奥行0.7m部分を検出したのみである。床面の中軸線の方法は、奥壁と直行する軸線を想定すれば $N-40^{\circ}-E$ となる。奥壁と側壁は、稜線によって区画されているが、天井部との関係は不明である。また奥壁は内傾しながら立ち上がっている。稜線も奥壁と平行するように立ち上がることから、変形ドーム形の可能性が高い。奥壁との境には、荒削りの段階で施されたと思われる工具痕跡が馬蹄状に残されていた。奥壁と側壁には、床面のものとは異なる2種類の工具痕跡が確認された。一つは幅6～8cmほどの整形時に施されたと考えられる工具痕跡で、高さ0.8m付近から上から下に向かってほぼ一定間隔で施されている。もう一つは、粗削り段階での細く鋭い刃先を残している工具痕跡で、方

IV. 遺構と遺物

向が斜めになったり長さも一定でなかったりしている。玄室の左奥にある穴によって15号横穴墓と貫通しているが、この穴は、構築時に開いたものかどうかは断定できなかった。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。



第19図 16号横穴墓実測図

【第17号・18号横穴墓】

13号横穴墓の西下方に17号横穴墓、12号横穴墓の西下方に18号横穴墓をそれぞれ確認したが、調査区外にあることから精査は行わなかった。

V. 総括

1. 横穴墓の構造

今回の調査で発見された横穴墓は総計18基である。各横穴墓は、一部あるいはそのほとんどが削平されており、完全な形で遺存していたものは皆無であった。玄室の平面形・立面形がわかるものは、1号・2号・5号・7号・9号・10号・11号・13号・15号横穴墓の9基である。また、遺物の出土した横穴墓は、2号・7号・13号の3基のみで、出土量・種類も極めて乏しく、年代的位置付けを行うことができなかった。しかし、このような限られた範囲内に多数の横穴墓が存在することや形態的に差異がみられることから、これらがすべて同時に存在したとは考えにくい。ここでは、横穴墓の構造・規模・形態等について検討可能な前述の9基に、推定復元の可能な横穴墓を含めてその特徴をまとめ、相対的な年代についても検討していきたい。

本地点には、玄門・羨道等の形態のわかる横穴墓はほとんどないことから、玄室の特徴をもとに分類を試みたい。分類項目は、(1)玄室平面形・(2)玄室立面形・(3)主軸方向・(4)玄室床面標高とした。

各項目にしたがって分類すれば、以下のとおりである。(() 内は推定。)

(1)玄室平面形

- A 類：方 形を呈するもの…………… 1号・4号・10号・11号
- B 類：隅丸方形を呈するもの…………… 2号・15号
- C 類：台 形を呈するもの…………… 5号・9号・13号・(3号・12号・16号)
- D 類：不 整形を呈するもの…………… 7号

(2)玄室立面形

- I 類：変形ドーム形を呈するもの……………10号・15号・(3号・16号)
- II 類：家 形を呈するもの…………… 1号・5号・11号
- III 類：アーチ形を呈するもの…………… 7号・9号・(4号・8号)
- IV 類：変形アーチ形を呈するもの…………… 2号・13号

(3)主軸方向

- a 類：N-9~15°-Eのもの…………… 2号・10号・11号
- b 類：N-22~26°-Eのもの…………… 1号・3号・4号・7号
- c 類：N-32~42°-Eのもの…………… 5号・9号・12号・13号・(8号・16号)
- d 類：N-50°~ -Eのもの……………15号

(4)玄室床面標高

V. 総括

- 1 類：28m 前後の高位にあるもの…… 1号・2号・5号・11号
- 2 類：27m 前後の中位にあるもの…… 3号・4号・6号・7号・9号・10号・12号
- 3 類：26m 未満の低位にあるもの…… 8号・13号・15号・16号

分類項目により各横穴墓を細別すれば次のとおりである。

A-I-a-2 ……10号

平面形 A 類、立面形 I 類、主軸方向 a 類、床面標高 2 類のもの

A-II-a-1 ……11号

平面形 A 類、立面形 II 類、主軸方向 a 類、床面標高 1 類のもの

A-II-b-1 ……1号

平面形 A 類、立面形 II 類、主軸方向 b 類、床面標高 1 類のもの

A-III-b-2 ……4号

平面形 A 類、立面形 III 類、主軸方向 b 類、床面標高 2 類のもの

A 類は、主軸方向が a・b 類のみで c・d 類がみられない。開口方向は、南ないし南南西をとる傾向にある。床面標高は 3 類の低段位のものがなく、高段に位置する傾向が認められる。

B-I-d-3 ……15号

平面形 B 類、立面形 I 類、主軸方向 d 類、床面標高 3 類のもの

B-IV-a-1 ……2号

平面形 B 類、立面形 IV 類、主軸方向 a 類、床面標高 1 類のもの

B 類は、立面形が I 類の変形ドーム形と IV 類の変形アーチ形で、整形形のもの含まれない。

C-I-b-2 ……3号

平面形 C 類、立面形 I 類、主軸方向 b 類、床面標高 2 類のもの

C-I-c-3 ……16号

平面形 C 類、立面形 I 類、主軸方向 c 類、床面標高 3 類のもの

C-II-c-1 ……5号

平面形 C 類、立面形 II 類、主軸方向 c 類、床面標高 1 類のもの

C-III-c-2 ……9号

平面形 C 類、立面形 III 類、主軸方向 c 類、床面標高 2 類のもの

C-IV-c-3 ……13号

平面形 C 類、立面形 IV 類、主軸方向 c 類、床面標高 3 類のもの

C-?-c-2 ……12号

平面形 C 類、立面形不明、主軸方向 c 類、床面標高 2 類のもの

C 類に属する横穴墓は計 6 基で最も多いが、主軸方向をみると、3号 (b 類) 1基を除き他は

全てc類で南西方向に開口している。立面形も全ての形態がみられ、高度分布でも低段位から高段位までの各位置にみられる。

D-III-b-2……………7号

平面形D類、立面形III類、主軸方向b類、床面標高2類のもの

?-III-c-3……………8号

平面形不明、立面形III類、主軸方向c類、床面標高3類のもの

D類には、立面形I類の変形ドーム形・II類の家形がみられない。

段位と主軸方向では、高段位にあるものは開口方向が南に向く傾向が強い。そして低段位に移るにしたがって、西向きに偏してくる傾向が認められよう。これには何らかの人為的規制があったものか、自然地形に起因するものか、丘陵の旧状が著しく改変されていることから検討できなかった。また、段位と立面形・平面形をみると、方形を呈するものは高段位に多い。そして、やや崩れた形態と考えられる台形・不整形を呈するものは、中段位から低段位に位置する傾向が強い。立面形II類の家形は高段位にみられ、III類のアーチ形は中段位に、I類の変形ドーム形は中段位から低段位と下方に位置する傾向が強い。

これを分類項目の(1)玄室平面形、(2)玄室立面形で整理すれば次の8つのタイプにまとめられる。

- | | | |
|--------|-----------------------|------------------|
| [タイプ1] | 平面形A類、立面形I類のもの | A-I類……………10号 |
| [タイプ2] | 平面形A類、立面形II類のもの | A-II類……………1号・11号 |
| [タイプ3] | 平面形A類、立面形III類のもの | A-III類……………4号 |
| [タイプ4] | 平面形B類、立面形I類のもの | B-I類……………15号 |
| [タイプ5] | 平面形B類、立面形IV類のもの | B-IV類……………2号 |
| [タイプ6] | 平面形C類、立面形I類のもの | C-I類……………3号・16号 |
| [タイプ7] | 平面形C類、立面形II類のもの | C-II類……………5号 |
| [タイプ8] | 平面形C・D類、立面形III・IV類のもの | |
| | | C-III類……………9号 |
| | | C-IV類……………13号 |
| | | D-III類……………7号 |

このように、各横穴墓は様々な形態・構造をもっており、これらの多様性は、被葬者の身分差や築造の時間差等を反映したものと考えられている。周辺横穴墓群の調査でも、一群内での構造上の多様性が指摘されており(註:6)、本群でも同様の傾向を示している。一方、各群毎に台床形態・立面形態・装飾等の特徴的な構造をもつ横穴墓が存在しており、これは各横穴墓を造営した集団の違いに起因する可能性も考えられる。よってここでは、各群間に多少の時間差はあるとしても、大きな時期差はなかったものとみておきたい。

2. 横穴墓の変遷

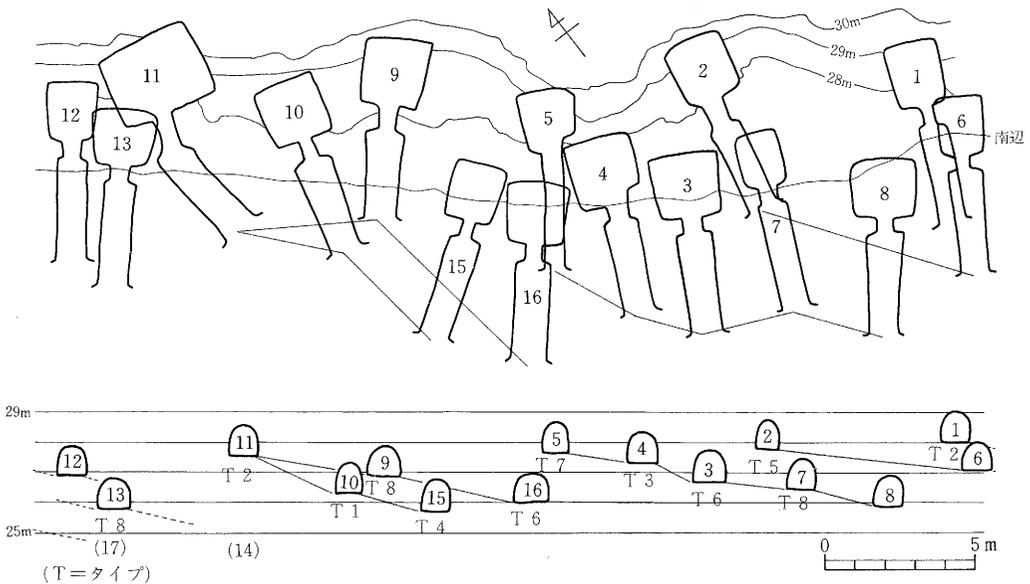
各横穴墓を平面形と立面形から概観し整理したところ、8つのタイプに大別することができた。次にここでは、主軸方向と玄室床面標高から検討を加えてみたい。

各横穴墓は破壊・削平が著しく、旧状をとどめるものほとんどなく、特に玄門から前方部分については検討資料が極めて少ない。羨道入口・前庭については皆無であることから、各横穴墓に至る墓道も不明である。

各横穴墓の主軸方向をみると、a~dの4つに分類したものの、N-9°-EからN-50°-Eまでかなりの幅がある。このことから丘陵崖面がかなり複雑な凹凸を持った斜面であったことが想定される。また、玄室床面標高も25m台から28mほどまでの間にランダムに分布するように見え、便宜上3段位に分類したが同レベルで並立する傾向は強くは認められない。しかしこのような狭い範囲に多くの横穴墓が密集しており、4号と5号の間にみられるような重複関係に近いものもあることから、各横穴墓の築造にあたっては、自然地形からの制約だけでなく何らかの人為的規制があったものと考えざるを得ない。

これまで、各横穴墓相互の玄室の平面的・立体的な位置関係、方向については検討してきたが、横穴墓築造時の崖面における入口の位置関係は、あまり検討することがなかった。

本群は、玄室の主軸方向や標高がランダムである。しかし、このような場合には羨道入口の配置関係は、玄室の配置とはかなり異なった様相を呈すると考えられる。そこでここでは、各



第20図 横穴羨道口位置想定図 (模式図)

横穴墓の羨道入口を玄室奥壁から主軸方向に一律 6 m の位置に仮定して設定してみた。6 m の数値については、羨道までの計測で最長値を示した 2 号横穴墓の計測値をもとに便宜上設定したもので、あくまで各横穴墓の相対的關係を示すだけの推定値である。羨道入口の標高値についても、実際には玄室床面より低くなるのが通例であるが、これもすべての横穴墓で同程度の落差が生じるものと仮定し、玄室標高で復元値を示している。(第20図・註：5)

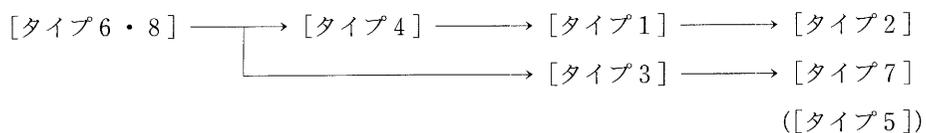
これらの検討の結果、本横穴墓群は、5 つ以上のグループに分類することが可能である。

- | |
|------------------------------|
| 【1 G】：1号 |
| 【2 G】：6号・2号 |
| 【3 G】：8号・7号・3号・4号・5号 |
| 【4 G】：16号・15号・9号・10号・11号 |
| 【5 G】：13号・12号（2つに分割される可能性あり） |

このような斜面を斜行するグループの存在は、大年寺山一帯に位置する茂ヶ崎横穴墓群でも認められており、低段位から高段位に向かう幾筋かの斜行築造順が推定された。(木村：1989) ここでも、これに沿って各グループでの変遷を推定すれば次のとおりである。

- | |
|-------------------------------------|
| 【1 G】： ? → 1号 |
| 【2 G】：6号 → 2号 |
| 【3 G】：8号 → 7号 → 3号 → 4号 → 5号 |
| 【4 G】：16号 → 9号 → 11号 ^(古) |
| ↓ |
| 15号 → 10号 → 11号 ^(新) |
| 【5 G】：13号・12号は不明 |

3・4グループでの変遷を、平面形と立面形でまとめたタイプ別にあてはめると次のようになる。



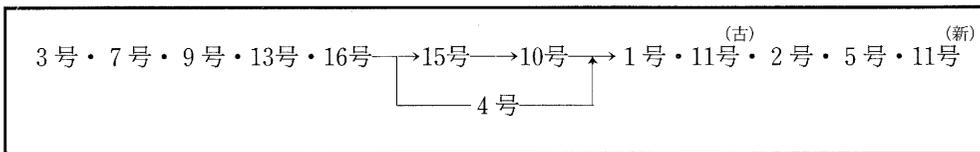
V. 総括

タイプ6・8は、3グループで8→6（7号→3号）と4グループで6→8（16号→9号）の両者があり、タイプ6とタイプ8の間に前後関係はないと考えられる。

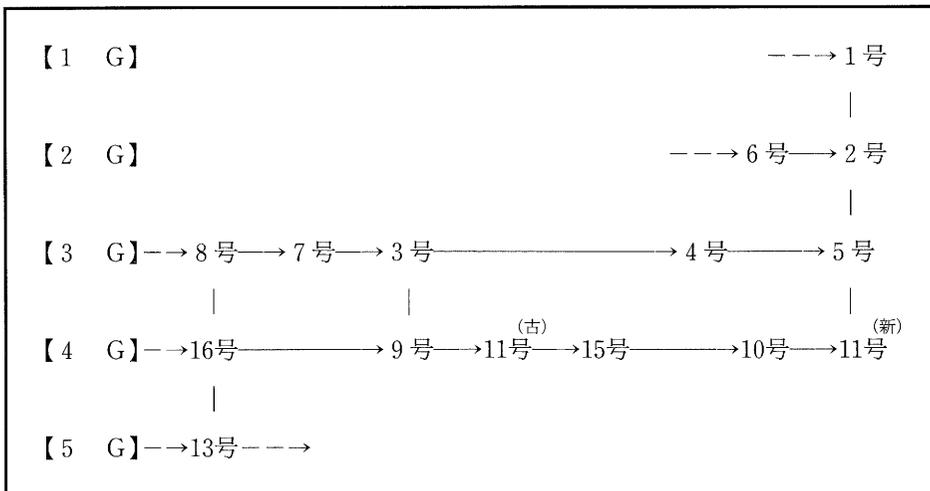
4グループでは、16号（タイプ6）→9号（タイプ8）と15号（タイプ4）→10号（タイプ1）の2つのルートが想定され、いずれも最後の段階で高段位にある11号（タイプ2）で一本化している。11号は前述したとおり改築の跡が認められることから、2系統に重複していることを裏づけるものと考えられる。15号・10号は、16号→9号→11号の入口を結ぶ推定通路に重複しており、これを壊して築造したと考えられることから、はじめに16号→9号→11号（古）ルートが築造され、その後1段下のルートである15号→10号→11号（新）というルートが造られたものとみておきたい。

2号（タイプ5）は高段位にあり、タイプ2（1号・11号）・タイプ7（5号）と同様相を呈していることから、タイプ2・7ともに最終段階にあるものと考えておきたい。

タイプ変遷を各横穴の変遷に置き換えれば、次のとおりである。



また、各グループ間の並行関係は次のとおりである。



ここでは復元的に築造順を推定した。しかし、各グループ間の先後関係や年代的な位置付けなどについて検討することは、年代を判定する出土遺物がないため困難を極める。また、被葬者の問題や周辺社会との関連などについても、今回の調査によって得られた資料からは検討できなかった。

3. ま と め

- (1) 本地区の横穴墓は、これまで調査された愛宕山横穴墓群 B 地点と愛宕山南側の斜面で西側に連続して分布している。このため本地区は、B 地点に含まれる。
- (2) 今回発見された横穴墓は18基で、そのうち15基を精査した。これまで B 地点では10基の横穴墓の存在が知られており、合計28基となった。
- (3) 今回の調査区の東西両側および南側既存道路下の斜面下方にも、さらに多くの横穴墓の存在が想定される。大窪谷地と称された越路の沢状の低地を挟み、大年寺山横穴墓群と向かい合うように分布している。
- (4) 今回調査された横穴墓は、いくつかのまとまりをもって分布している。1つのグループは5基ほどで構成され、そのグループは5つ以上みられる。
- (5) 横穴墓の年代については、形態や周辺地区の調査などから概ね6世紀末～8世紀と考えられるが、出土遺物が極めて少ないため細かな検討はできなかった。

註・参考文献

- 註1 『仙台地域の地質』（北村・石川・寒川・中川）昭和61年 地質調査所
- 註2 本格的な調査以前の報告として、山中樵（1910）『仙臺市外大年寺山の横穴』や清水東四郎（1938）『宮城県内の古墳及び横穴』があり、本来はかなりの数の横穴墓が存在していたものとみられる。
- 註3 各横穴墓の中軸方向は、玄室の玄門側の中心点と奥壁側の中心点を結んだ中軸線を計測した。
- 註4 玄室と羨道の中軸方向が異なる場合は、玄室の中軸方向と羨道のそれとの平均値を算出した。
- 註5 第20図「横穴羨道口位置想定図」は、次のような条件を想定して作成した。
- ①標高は便宜上、玄室床面と同レベルとした。
 - ②羨道口までの全長は、玄室奥壁からほぼ6 mとした。
 - ③羨道口の幅は、ほぼ1 m前後とした。
 - ④羨道口の高さは、ほぼ1 mとした。
- 註6 宗禅寺横穴墓群の調査では、構造上の多様性を指摘した上で、これらが時期的な違いを反映しているとは言い難いと考えられた。また、大年寺山横穴墓群の調査でも、様々な内部構造を持つ横穴墓が混在するとした上で、その群に特徴的な構造の横穴墓があることを指摘しており、さらに内部構造の差異は、それを営んだ集団の差と想定している。

参 考 文 献

- 辻 秀人：「宮城の横穴と須恵器」『宮城の研究 I 考古学篇』 清文堂 1984
- 池上 悟：「横穴墓」『考古学ライブラリー』第6巻 ニューサイエンス社 1980
- 氏家和典：『東北古代史の基礎的研究』 東北プリント 1988
- 木村浩二：「茂ヶ崎横穴墓群発掘調査報告書」仙台市文化財発掘調査報告書第130集 1989
- 結城慎一：「愛宕山装飾横穴古墳発掘調査報告書」仙台市文化財発掘調査報告書第85集 1985
- 岩渕康治：「愛宕山横穴群発掘調査報告書」仙台市文化財発掘調査報告書第8集 1974
- 伊東信雄・岩渕康治・田中則和：
「宗禅寺横穴群発掘調査報告書」仙台市文化財発掘調査報告書第9集 1976
- 大越道正・光家孝一・安中 浩・齋藤彰裕：
「駒板新田横穴群」『東北横断自動車道遺跡調査報告6』
福島県文化財調査報告書第220集 1989
- 佐々木安彦・三宅宗議：
「青山横穴古墳群・混内山横穴古墳群」
宮城県三本木町文化財調査報告書第3集 1975
- 高倉敏明・滝口 卓・石川俊英・石本 敬・千葉孝弥・相沢清利：
「大代横穴古墳群発掘調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第7集 1985
- 宮城県教育委員会：
「山畑装飾横穴古墳群発掘調査概報」宮城県発掘調査報告書第32集 1973
- 佐々木安彦・阿部 恵：
「朽木橋横穴古墳群」『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』
宮城県文化財調査報告書第96集 1983
- 進藤秋輝・佐藤則之・菊地芳朗：
「大年寺山横穴群」宮城県文化財調査報告書第136集 1990

表2 土器観察表

遺物番号	種別	器形	出土横穴	外面調整	内面調整	図番号	写真図版
E-1	須恵器	壺?	10号横穴	ロクロ痕・一部手持ちヘラ削り	ロクロ痕	—	図版32
E-2	須恵器	甕	12号横穴	格子叩き目痕	細木目状当て具痕(同心円文)	—	図版33

表3 ガラス小玉

遺物番号	出土横穴	径(mm)	高さ(mm)	重さ(g)	色調・備考	図番号	写真図版
K-1	7号横穴	3.9	2.3	計測不能	透明淡青色	第10-1図	図版31
K-2	7号横穴	3.8	2.4~2.8	計測不能	透明淡青色	第10-1図	図版31

表4 金属製品計測表(単位:mm)

遺物番号	出土横穴	種別	全長	最大幅	最大厚	刃長	茎			備考	図番号	写真図版
							長さ	幅	厚さ			
N-1	2号横穴	直刀	(146) ^{*1}	31.5	5.6	(54.5) ^{*1}	(91) ^{*1}	20.9	4.6	組・目釘あり	第5-1図	図版28
N-2	2号横穴	直刀	—	28.6	6.3	—	—	—	—	—	第5-1図	図版28
N-3	7号横穴	刀子	(94) ^{*1}	12.4	4.2	—	—	—	—	—	第10-1図	図版30
N-4	13号横穴	直刀	570.5	25	8.5	(484) ^{*2}	(84) ^{*2}	(21) ^{*2}	(10.5) ^{*2}	—	第17図	図版29

※1 () は、残存長

※2 () は、推定

表5 出土鉄鏃計測表(単位:mm)

遺物番号	出土横穴	種類	全長	鏃身部			頸部		備考	図番号	写真図版
				最大厚	最大幅	長さ	茎部長	茎幅			
N-5	2号横穴	—	(92)	—	—	—	(92)	6.6	頸部のみ	第5-1図	図版28
N-6	2号横穴	刀子形	(42.6)	2.6	6.7	—	—	—	先端のみ	第5-1図	図版28
N-7	7号横穴	平根形	(24.5)	2.9	8.4	—	—	—	先端のみ	第10-1図	図版30

() は残存長

写 真 图 版



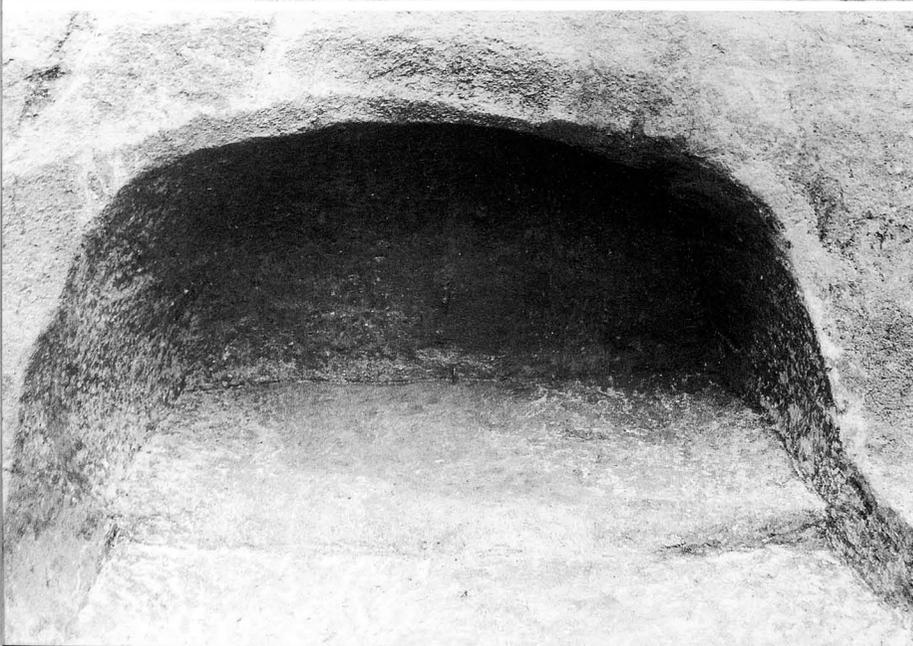
図版1 愛宕山横穴墓群周辺航空写真
(昭和27年撮影)



図版 2
崖面表土除去
2～5号横穴墓確認状況



図版 3
第1号横穴墓

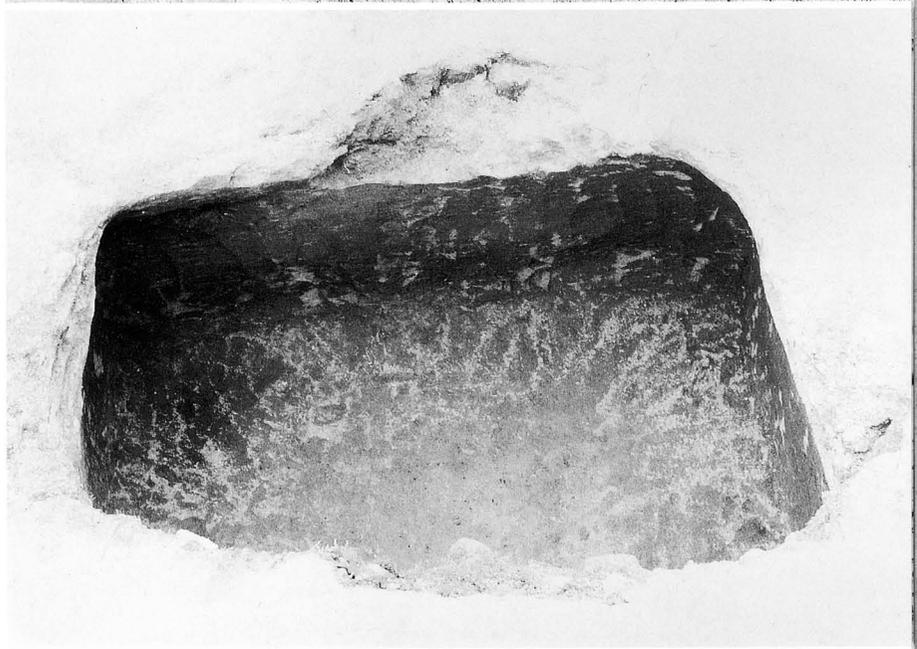


図版 4
第2号横穴墓玄室

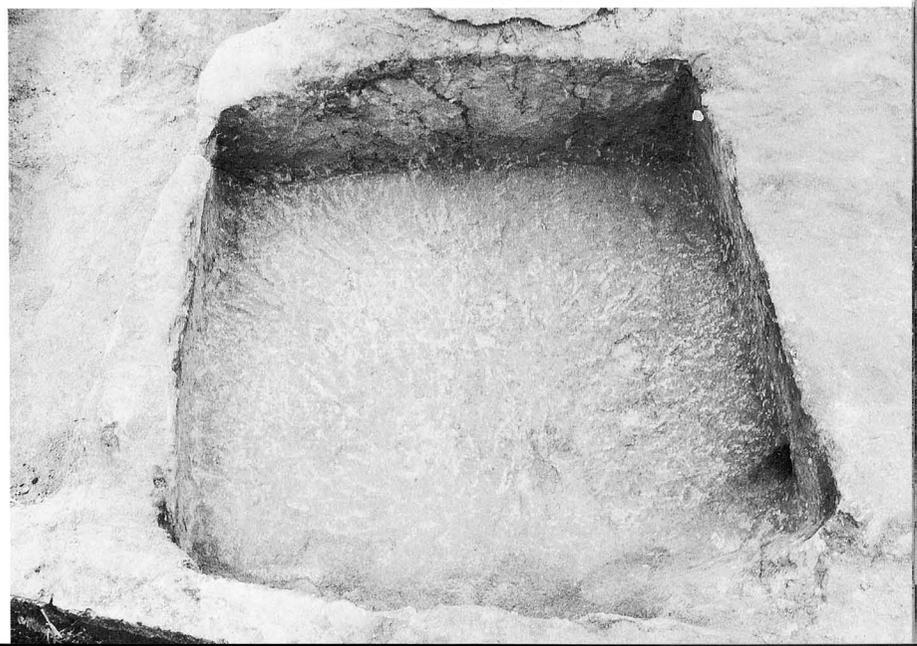
图版 5
第 2 号横穴墓
遗物出土状况



图版 6
第 3 号横穴墓



图版 7
第 4 号横穴墓





図版 8
第 5 号横穴墓



図版 9
第 5 号横穴墓奥壁
および工具痕跡

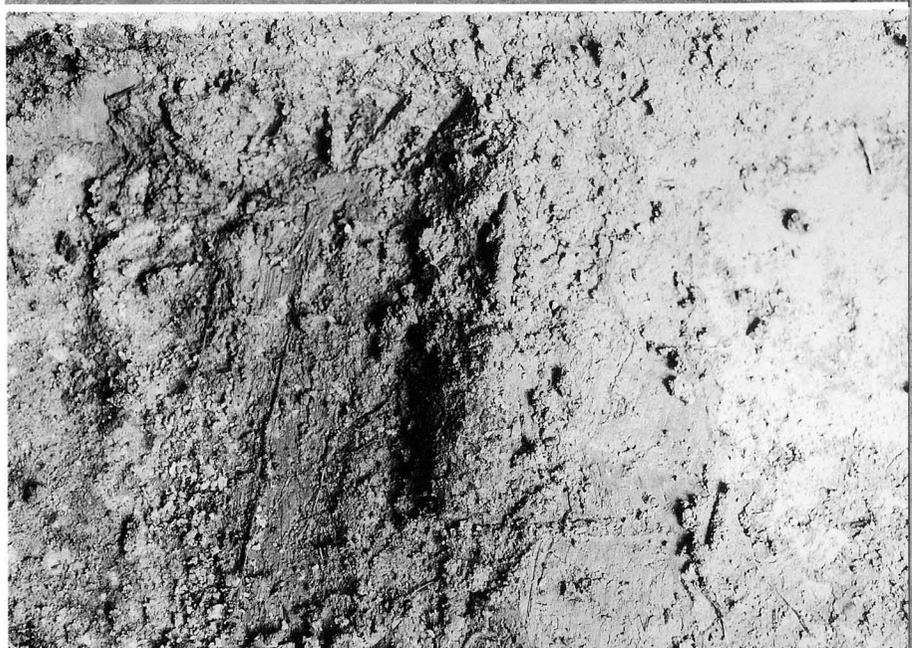


図版10
第 6 号横穴墓

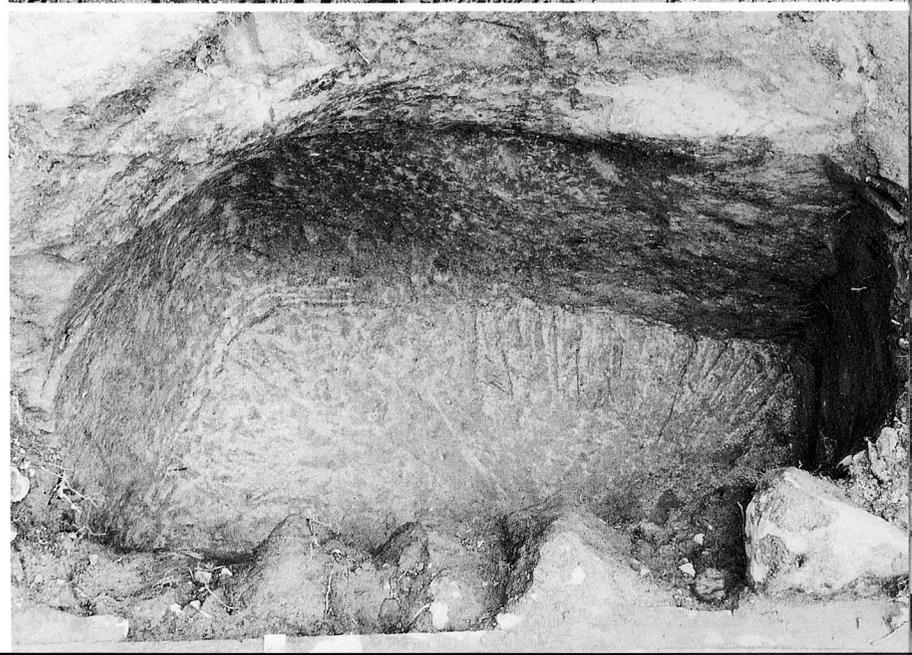
图版11
第7号横穴墓
奥壁



图版12
第7号横穴墓
刀子出土状况

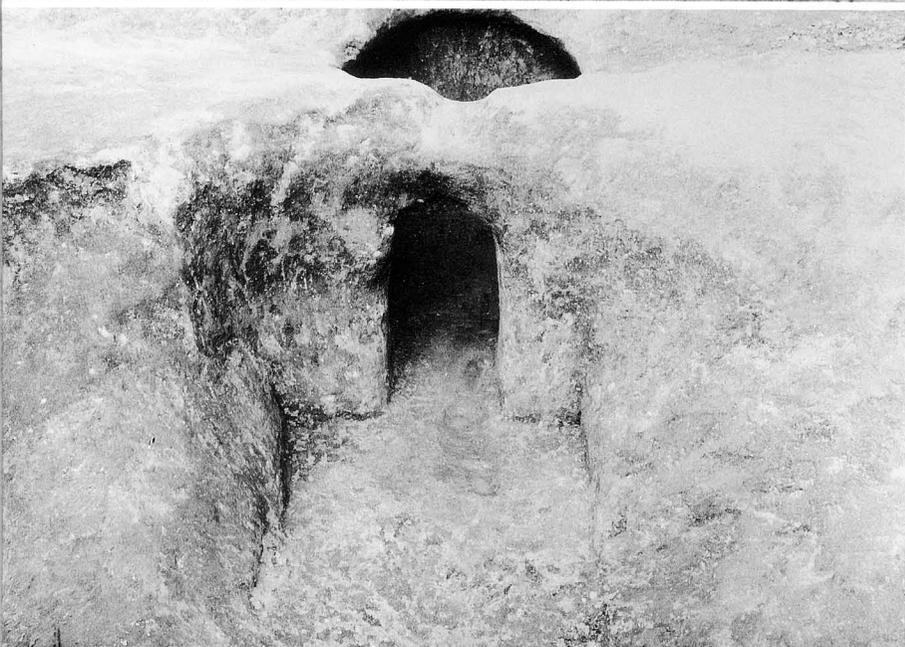


图版13
第8号横穴墓

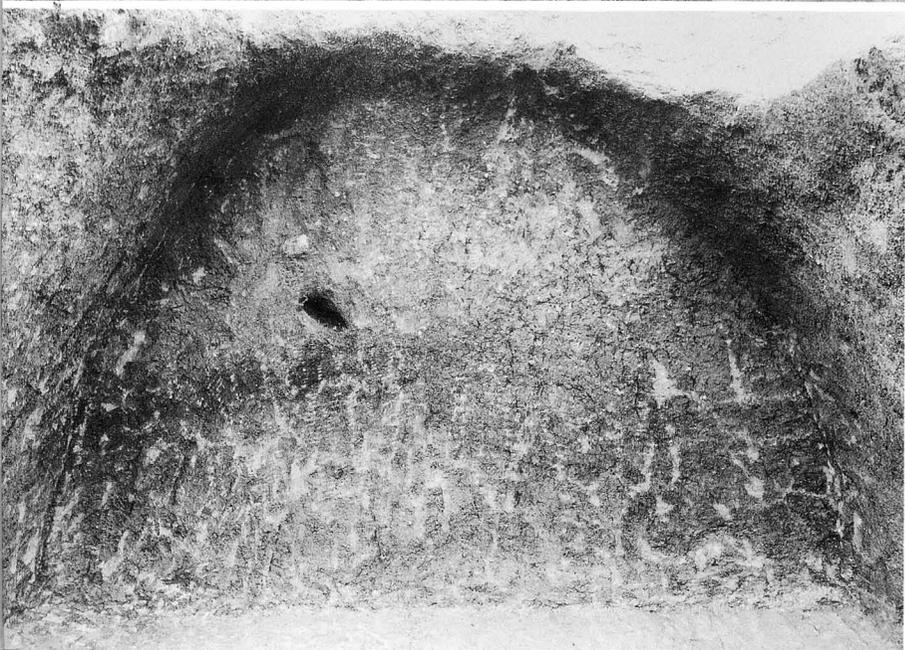




图版14
第8号横穴墓
床面工具痕迹



图版15
第9号横穴墓玄門



图版16
第9号横穴墓奥壁

図版17
第9号横穴墓
玄室から玄門



図版18
第10号横穴墓
奥壁



図版19
第10号横穴墓
敷石





图版20
第11号横穴墓



图版21
第12号横穴墓



图版22
第13号横穴墓
直刀出土状况

図版23
第14号横穴墓
確認状況

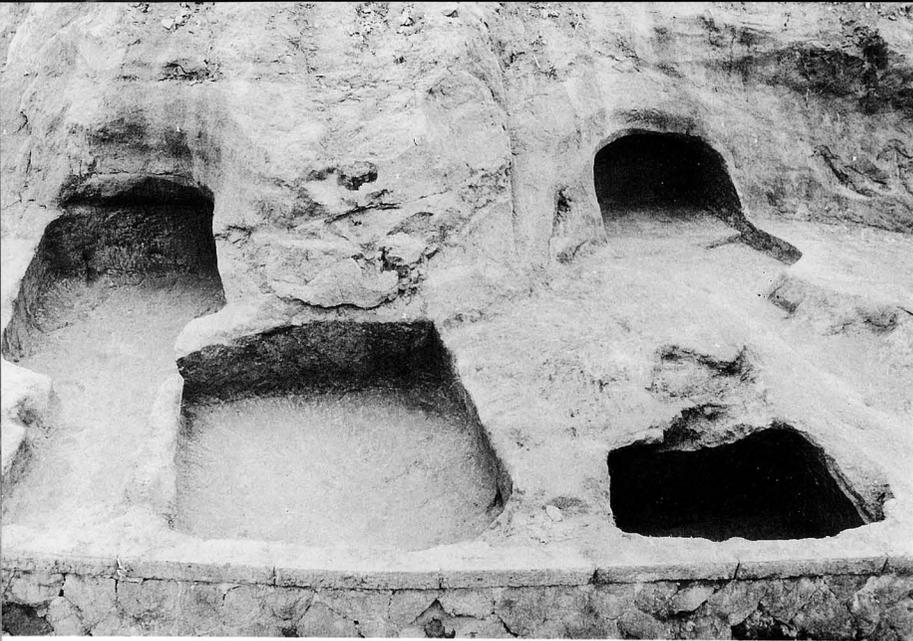


図版24
第15号横穴墓
東壁



図版25
第1・2・6・
7・8号横穴墓

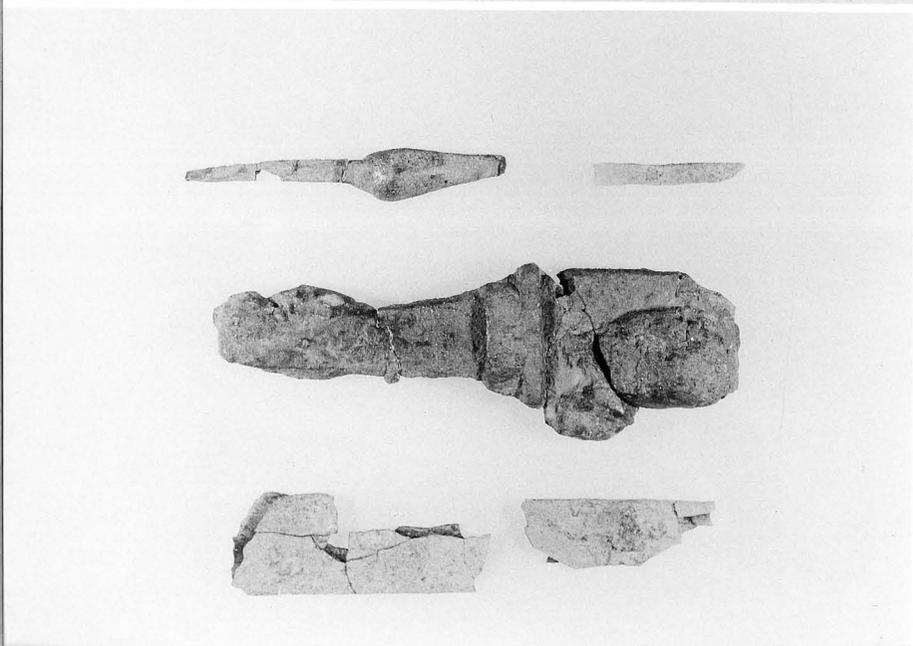




図版26
第2・3・4・5号
横穴墓



図版27
第9・10・11・12・13号
横穴墓



図版28
第2号横穴墓出土遺物

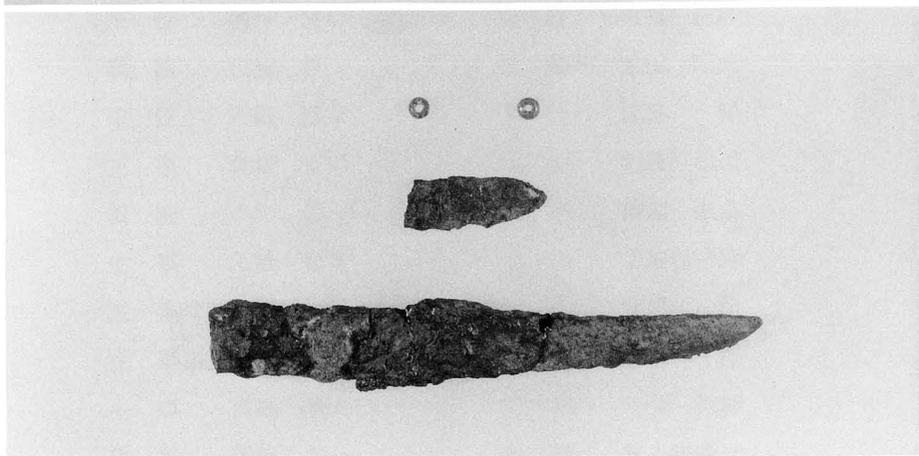
上段 (N-5) (N-6)
中段 (N-1)
下段 (N-2)

図版29
第13号横穴墓
出土遺物 (N-4)

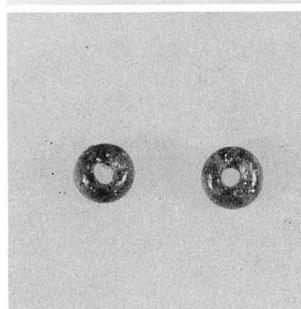


図版30
第7号横穴墓
出土遺物

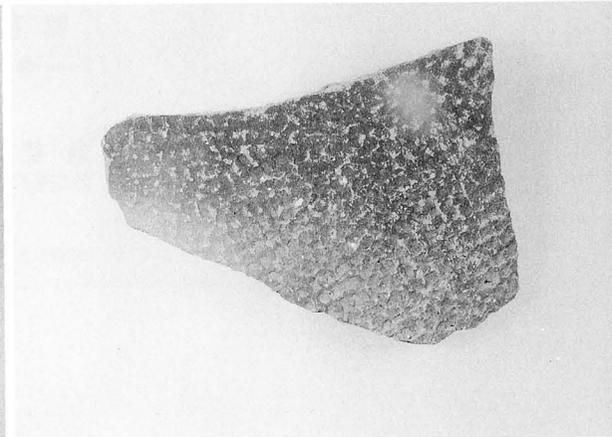
上段 (K-2) (K-1)
中段 (N-7)
下段 (N-3)



図版31
第7号横穴墓出土
ガラス小玉
(左: K-2、右: K-1)



図版32
第10号横穴墓出土遺物
(E-1)



図版33 第13号横穴墓出土遺物 (E-2) (左: 内面、右: 外面)

文化財課職員録

課長 白鳥 良一

[管理係]

係長 菅原 澄雄
主任 村上 道子
主事 福井 健司
主事 庄司 厚
主事 齋藤 英治
主事 佐藤 寿江

[調査第一係]

係長 田中 則和
主任 木村 浩二
教諭 佐藤 好一
主任 吉岡 恭平
主事 金森 安孝
教諭 小川 淳一
主事 工藤 哲司
主事 主浜 光朗
主事 斎野 裕彦
主事 長島 榮一
教諭 稲葉 俊一
教諭 菅原 裕樹
主事 渡部 紀
教諭 川名 秀一
教諭 熊谷 裕行

[調査第二係]

係長 結城 慎一
主任 篠原 信彦
教諭 太田 昭夫
主任 佐藤 洋
主事 佐藤 甲二
主事 渡部 弘美
主事 工藤信一郎
主事 荒井 格
主事 中富 洋
主事 平間 亮輔
教諭 五十嵐康洋
教諭 神成 浩志
教諭 赤澤 靖章
教諭 竹田 幸司
主事 佐藤 淳

仙台市文化財調査報告書第187集

仙台市
愛宕山横穴墓群

—第3次発掘調査報告書—

1994年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町3-7-1

印刷 (株) 東北プリント
仙台市青葉区立町24-24
